大正元年十月一日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）大正二年七月一日發行 第一巻第十號

近代思想

七月號

近代思想社
東京府下大久保百人町三五二

七月上旬發行

罪と罰

ドストエフスキー作
內田魯庵譯

前篇

四六判ポイント式印刷
五百五十餘頁裝釘雅麗

正價金壹圓四拾錢

或はマクベス以後の大悲劇と稱し、或はファウストと聯ぶの最大傑作也と云ふ、敎授ブルユックネルの如きは人生の眞の悲痛はファウストよりも却て此作に於て見るべしと激稱せり、眞に是れ**人間の靈の叫び**にして回一回を重ぬる每に**肉動き骨鳴るの感**惻々迫りて讀終りて毛孔粟生、髓腦微顫するに禁へず、今日如何なる作家[illegible]ド氏の影響を受けざるものなく、アンドレーエフやストリンドベルヒやダヌンチオや皆間[illegible]にド氏の產みたる子にしてド氏の作の如くにして初めて人生の眞を語ると云つべき也

東京市日本橋區通三丁目
丸善株式會社

純米國式の大雑誌ナショナル

七月號

本誌菊倍版百二十頁全紙アートペーパー●寫眞版挿畫百餘箇
定價一部金三十五錢
同一ケ年金四圓（郵稅共）

發行所 ナショナル社
東京京橋區木挽町
電話新橋五七九番
振替口座二四八九一番

主なる記事

▼三劇場
▼三井の人
▼モンテツソリー新教育法
▼面白い金のため方
▼獨逸馬の時代……若宮卯之助
▼働きの人林民雄君……無花生
▼簿記係の天下……池田藤四郎
▼空中の危險
（其の他）



第一巻第十號

新しい女

僕は所謂新しい女に對して、半ば同感すると同時に、また半ば反感する。

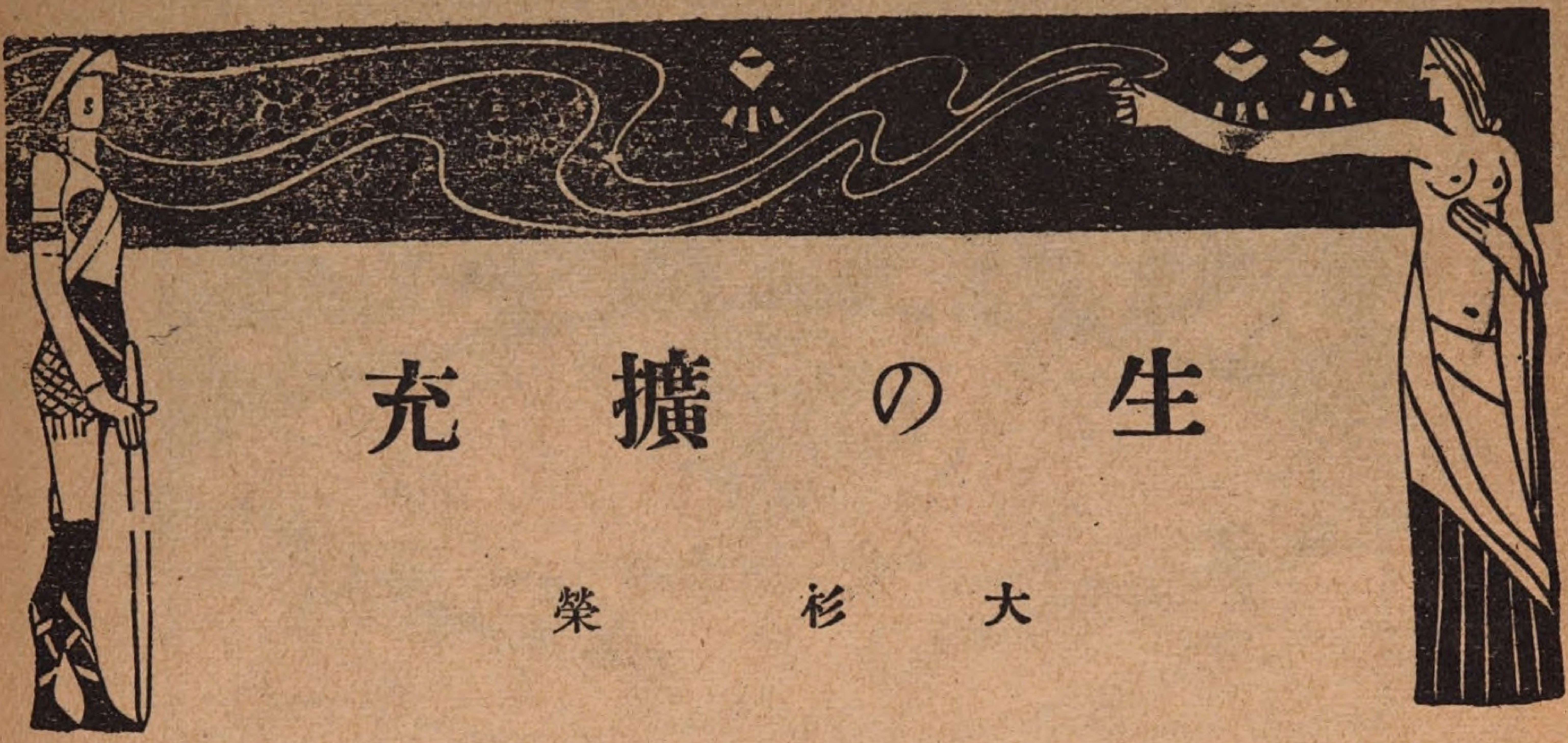
所謂新しい女とは、征服階級の男の玩弄品たり奢侈品たる地位から、一躍して征服階級の直接の一員たらんとする女である。

彼女等の自覺とは、要するに此處までの自覺に過ぎない。眞に人としての自覺ではなく、征服階級の人としての自覺に過ぎない。彼女等の自覺は、自己と周圍との關係を僅に征服階級の世界に限つた自覺である。彼女等は未だ自己の周圍に男女の被征服階級が存在する事を知らない。

眞に新しい女は、所謂婦人問題などを餘り口にしない。所謂婦人運動などには餘り係はらない。ルイズ・ミツシエルも、エンマ・ゴールドマンも、エラ・フイグネルも、遂にフエミニズムには與らない。彼女等は眞に人たるべく、高等教育を要求しない、高等職業を要求しない、參政權を要求しない。彼女等は又、特に自己完成を、何によりも先きに强調する事をしない。彼女等は男の力を借りない事を誇りとする程幼稚ではなかつた。彼女等は自ら進んで男の群に投じた。又彼女等の群に男が投じて來るのを喜んで迎へた。

眞に新しき彼女等は、自己と自己の全周圍との關係を自覺したのであつた。

—榮—



生の擴充

大杉榮

一

前號の『征服の事實』の中に、僕は『過去と現在と及び近き將來との數萬或は數千年間の人類社會の根本事實』たる征服の事を說いて、これが『明瞭に意識されない間は社會の出來事の何物も正當に理解するを許されない』と斷じた。

そして更にこの論を藝術界に及ぼして、『この征服の事實と及びそれに對する反抗とに觸れざる限り、諸君の作物は遊びである、戲れである。吾々の日常生活にまで壓迫して來る、この事實の重さを忘れしめんとする、あきらめである。組織的瞞着の有力なる一分子である』と爲し、最後に次の如き結論を下した。

『吾々をして徒らに恍惚たらしめる靜的美は、もはや吾々とは沒交涉である。吾々はエクスタシーと同時にアンツウジアスムを生ぜしめる動的美に憧れたい。吾々の要求する文藝は、かの事實に對する憎惡美と反逆美との創造的文藝である。』

今僕は再びこの問題に入つて、この三項の聯絡をもう少し緊密にし、從つて僕のこの主張に更に多少の內容的明白を加へたいと思ふ。

二

生と云ふ事、生の擴充と云ふ事は、云ふまでもなく近代思想の基調である。近代思想のアルフアでありオメガである。然らば生とは何にか、生の擴充とは何にか、僕は先づこゝから出立しなければならぬ。

生には廣義と狹義とがある。僕は今その最も狹い個人の生の義をとる。この生の神髓は即ち自我である。そして自我とは要するに一種の力である。力學上の力の法則に從ふ一種の力である。

力は直ちに動作となつて現はれねばならぬ。何んとなれば力の存在と動作とは同意義のものである。從つて力の活動は避け得られるものでない。活動そのものが力の全部なのである。活動は力の唯一のアスペクトである。

されば吾々の生の必然の論理は、吾々に活動を命ずる。又擴張を命ずる。何んとなれば活動とはある存在物を空間に展開せしめんとするの謂に外ならぬ。

けれども生の擴張には、又生の充實を伴はねばならぬ。寧ろその充實が擴張を餘儀

なくせしめるのである。従つて充實と擴張とは同一物であられればならぬ。

かくして生の擴充は吾々の唯一の眞の義務となる。吾々の生の執念深い要請を滿足さするものは、唯最も有効なる活動のみとなる。又生の必然の論理は、生の擴充を障礙せんとする一切の事物を除去し破壞すべく、吾々に命ずる。そしてこの命令に背く時、吾々の生は、吾々の自我は、停滯し、腐敗し、壞滅する。

三

生の擴充は生そのものゝ根本的性質である。原始以來人類は既にその生の擴充の爲めに、その周圍との闘爭と、及びその周圍の利用とを續けて來た。又人類同士の間にも、お互の生の擴充の爲めに、お互の闘爭と利用とを續けて來た。そしてこの人類同士の闘爭と利用とが、人類をして、未だ發達したる智識の光明に照されざりし、その生の道をふみ迷はしめたのである。

人類同士の闘爭と利用とは、却つてお互の生の擴充の障礙となつた。即ち誤まれる方法の闘爭と利用との結果、同じ人類の間に征服者と被征服者との兩極を生じた。この事は既に前號の「征服の事實」の中に詳論した。

被征服者の生の擴充は殆んど杜絶せられた。彼等は殆んど自我を失つた。彼等はたゞ征服者の意志と命令とによつて動作する奴隷となつた、器械となつた。自己の生、自己の我の發展をとゞめられた被征服者は勢ひ墮落せざるを得ない、腐敗せざるを得ない。

征服者とても亦同じ事である。奴隷の腐敗と墮落とは、ひいて主人の上にも及ばさずにはやまない。又奴隷には奴隷の不德があれば、主人には主人の不德がある。奴隷に卑屈があれば、主人には傲慢がある。云はゞ奴隷は消極的に生を毀ち、主人は積極的に生を損ずる。人としての生の擴充を障礙する事は、何れも同一である。

又この人類同士の闘爭と利用とは、人類がその周圍と闘爭し、その周圍を利用する事に著しき障礙を來さしめた。

四

この兩極の生の毀損が將に壞滅に近づかんとする時、こゝにいつも侵寇か或は革命が起つて來る。比較的に健全なる生を有する中間階級が、イニシエチブを取つて、被征服階級の救濟の名の下に、その援助をかりて事を擧げる。或は被征服階級の絶望的反亂となつて、中間階級の利用の下に事を擧げる。そしてその當然の結果は、常に中間階級が新しき主人となる事によつて終る。人類の歷史は要するにこの繰返しである。繰返しの度每に多少の進化を經たる繰返へしである。

けれども人類は遂に原始に歸る事を知らなかつた。人類が未だ主人と奴隷とに分れない原始に歸る事を知らなかつた。自己意識のなかつた原始の自由時代に、更に十分なる自己意識を提げて歸る事を知らなかつた。絶大なる意味の歷史の繰返へしをする事を知らなかつた。

久しく主人と奴隷との社會に在つた人類は、主人のない、奴隷のない社會を想像する事が出來なかつた。人の上の人の權威を排除して、我れみづから我れを主宰する事が、生の擴充の至上の手段である事に想ひ到らなかつた。

彼等はたゞ主人を選んだ。主人の名を變へた。そして遂に根本の征服の事實そのものに斧を觸れる事を敢てしなかつた。これが人類の歷史の最大誤謬である。

吾々はもうこの歴史の繰返へしを終らねばならぬ。數千數萬年間のヒルグリメージは、既に吾々にこの繰返へしの愚を敎へた。吾々はこの繰返へしを終る爲めに、最後の絶大なる繰返へしを行はねばならぬ。個人としての生の眞の擴充の爲めに、人類としての生の眞の擴充の爲めに。

五

今や近代社會の征服事實は、殆んどその絶頂に達した。征服階級それ自身も、中間階級も、又被征服階級も、何れもこの事實の重さに堪へられなくなつた。征服階級はその過大なる或は異常なる生の發展にみづから苦惱し出して來た。被征服階級はその壓迫せられたる生の窒息にみづから苦惱し出して來た。そして中間階級は亦、この兩階級の何れもの苦惱に襲はれて來た。これが近代の生の惱みの主因である。

ここに於てか、生が生きて行く爲めには、かの征服の事實に對する憎惡が生ぜねばならぬ。憎惡が更に反逆を生ぜねばならぬ。新生活の要求が起きねばならぬ。人の上に人の權威を戴かない、自我が自我を主宰する、自由生活の要求が起らねばならぬ。果して少數者の間に殊に被征服者中の少數者の間に、この感情と、この思想と、この意志とが起つて來た。

吾々の生の執念深い要請を滿足させる、唯一の最も有効なる活動として、先づかの征服の事實に對する反逆が現はれた。又かの征服の事實から生ずる、そして吾々の生の擴充を障礙する、一切の事物に對する破壞が現はれた。

そして生の擴充の中に生の至上の美を見る僕は、この反逆とこの破壞との中にのみ、今日生の至上の美を見る。征服の事實がその頂上に達した今日に於ては、階調はもはや美ではない。美はたゞ亂調に在る。階調は僞りである。眞はたゞ亂調に在る。

今や生の擴充はたゞ反逆によつてのみ達せられる。新生活の創造、新社會の創造はたゞ反逆によるのみである。

六

僕は僕自身の生活に於て、この反逆の中に、無限の美を享樂しつゝある。そして僕の所謂實行の藝術なる意義も亦、要するにこゝに在る。實行とは生の直接の活動である。そして頭腦の科學的洗練を受けた近代人の實行は、所謂「本氣の沙汰でない」實行ではない。前後の思慮のない實行ではない。強ちに手ばかりに任した實行ではない。

多年の觀察と思索とから、生の最も有効なる活動であると信じた實行である。實行の前後は勿論、その最中と雖も、猶當面の事件の背景が十分に頭に映じてゐる實行である。實行に伴ふ觀照がある。觀照に伴ふ恍惚がある。恍惚に伴ふ熱情がある。そしてこの熱情は更に新しき實行を呼ぶ。そこにはもう單一な主觀も、單一な客觀もない。主觀と客觀とが合致する。これがレヴォリュショナリーとしての僕の法悅の境である。藝術の境である。

且つこの境に在る間、かの征服の事實に對する僕の意識は、全心的に最も明瞭なる時である。僕の自我は、僕の生は、最も確實に樹立した時である。そしてこの境を經驗する度每に、僕の意識と僕の自我とは、益々明瞭に益々確實になつて行く。生の歡喜があふれて行く。

七

僕の生のこの充實は、又同時に僕の生の擴張である。そして又同時に、人類の生の

擴充である。僕は僕の生の活動の中に、人類の生の活動を見る。

又、かくの如き最も有効なる生の活動方向をとつてゐるものは、たゞに僕一人ではない。眞に自己を自覺し、又自己と周圍との關係を自覺した人々は、今日猶甚だ少數ながらも、しかも既に斷乎たる歩みをこの道に進めてゐる。盲目者の外は何人も見逃す事の出來ない、將來社會の大勢を形づくりつゝある。

現實の上に立脚すると云ふ、日本のこの頃の文藝が、なぜ社會の根本事實たる、しかも今日その絶頂に達したる、かの征服の事に觸れないのか。近代の生の惱みの根本に觸れないのか。更に一歩進んで、なぜそれに對するこの反逆の事實に觸れないのか。この新しき生、新しき社會の創造に觸れないのか。確實なる社會的智識の根底の上に築かれた、徹底せる憎惡美と反逆美との創造的文藝が現はれないのか。

僕は生の要求する所に從つて、この意味の傾向的の文藝を要求する、科學を要求する、哲學を要求する。

新刊紹介

■圓窓より（らいてう著）

發賣禁止になつたので、今は『扇ある窓にて』と改題して再版せられてゐる。

主として雜誌『青鞜』に載せた十六篇の文章より成る。多くはごく切れ〴〵の批評か或は感想である。

一讀して僕の頭に殘つた印象は、著者が甚だしき抽象の人、神秘の人といふ事であつた。恐くはこれは著者の禪學が與つて力ある事だらうと思ふ。著者の觀察や批評の可なりに明敏な事は、すぐにもうなづかれるのであるが、さて著者自身の思想を積極的に述べた所になると、僕等のやうなものは一寸ぼんやりして了ふ。

實は隨分精讀もしたのだし、別に一篇の論文としてこの書を論ずるつもりでもゐたのだが、頭の具合がわるいので、ホンのこれだけの事を云つて置く。（榮）（金九十錢、日本橋區檜物町東雲堂）

■來世の有無（新佛教編）

雜誌『新佛教』が提出したこの問題に對する謂はゆる天下の名士二百餘名の解答集である。實に馬鹿氣きつた愚問だ。しかしこの愚問に對する解答者のそれ〴〵の態度を觀察すると頗る面白いものがある。又新佛教がわざ〳〵この愚問を發した眞意も、この意地のわるい探りを入れる處にあるらしく思はれる。

殊に坊主の態度が最も妙だ。

浩々洞の連中は、先師清澤の法事にかこつけて、『御免下され度候』と逃げてゐる。田中智學は眼病をたてにして、『宜敷お斷り申上候樣との事に候』と、執事に斷りを云はせてゐる。大道長安は腦病の故を以て『御慈眼願上候』と、あやまつてゐる。釋宗演は『明後日渡米致候に付、尊慮に從ひ兼候』と、これまた執事を以て斷らせてゐる。加藤玄智は親類に大患出產の騷ぎがある。釋雲照は『非常にご多忙』だ。今更の事でもないが、坊主と云ふものゝ卑怯と虛僞とがまざ〳〵と現はれてゐる。その他學者には學者の態度がある。實業家にも、文藝家にも、御役人にも、皆なそれ〴〵の態度がある。殊に愚答の多いのには驚かされる。かう云ふ研究には見て置いていゝ本だ。（榮）（金七十錢、小石川原町丙午出版社）

『續經濟學講義』を讀みて

高畠素之

一

福田德三氏の新著『續經濟學講義』は「流通生活に關する根本見解を示めし、兼てマルクス研究に費やしたる若干の年月と多少の思索との結果を載す」といふので頗る我々の興味を牽いた。

然し「近代思想」の紙上に於いて此書の細評をする餘地は無い。只直接マルクスに關する二三の點だけに就いて少しく其妄を辨じて置きたいと思ふ。

先づ福田氏は、マルクスの「勞働を以て價値の唯一淵源なりとする宿論」を全然謬説だと云つて居るが、何故に謬説なのか、單に「價値とは要するに物に對する心の判斷に外ならず」と云つた丈では何うにも仕方がない。マルクスの價値説を誤謬なりと斷定するからには、斯く斷定する當人の價値説を、今少し堂々と説明して掛らなければ駄目である。

次に福田氏は、スミスの「勞働を價値の淵源なりとするは謬れる前提なり。利潤を價値付け行程に於ける餘剩價値その者なりと認むるは…………正しき解説なり」と云つて、マルクスの餘剩價値が、如何にも「價値付け行程」以外の所から出て來る樣に云つてゐるが、マルクスの所謂「價値付け行程」とは要するに價値發展の方面より(即ち餘剩價値收得の方面より)觀たる生産行程の謂である。して見れば、マルクスの立場から云つても、餘剩價値は當然に價値付け行程の中より生ずることになるではないか。

然し福田氏は、恐らく賣買とか取引とか云ふ語を使用したのであらう。若しそうだとすれば、茲に「價値付け行程」と云ふ莫然たる意味に於いて、マルクスの所謂「價値付け行程」とは全然意義が違ふことになつて、今迄氏が「價値付け行程」と云つて來たのが、果して何方の「價値付け行程」であつたのか分らなくなる。

尤も福田氏の謂ふ樣な意味でマルクスの G—W—G' 方式を「價値付け行程」と云へば云へぬことは無いけれども、夫は大体の話であつて、G(貨幣、即ち元資本)が G'(即ち價値付けられたる貨幣)となるのは、決して賣買行爲其の者(即ち流通行程)に依るのではない。G—Mと云ふ購買行程が G' の結果を生ずるのは、實は G を以て購買したるW(即ち商品)が W……P……W' の働を營むからである。即ち生産行程を通過するからである。さればマルクスも、

「勞働力の消費行程は又た同時に商品及び餘剩價値の生産行程である。而して勞働力の消費は、他の總ての商品の消費と同じく市場即ち流通範圍の外に於いて行はるゝものである。」(資本論一卷一三八頁)

と云つたのである。流通行程が同時に又た價値付け行程たり得るのは、實は此の生産行程の爲めであつて、流通行程が夫れ自身に於いて餘剩價値を産出するが爲めではない。餘剩價値を形成するのは、流通行程に非ずして生産行程である。

二

次にマルクスが「資本論」第三卷に於いて、第一卷の論據を改説したと云ふ説は、福田氏のみならず、西洋のマルクス批評家の間

には隨分流行して居る說であつて、彼の有名なるバエルクを初として、スロニスキー、マツサリツク等の諸學者は皆な此說を取つてゐる。

元來マルクスの說に依ると、餘剩價値の生ずるのは全然、可變資本の働による者であるから、投入資本の總額は同じで有つても、若し其の有機的構成に差違ある場合には、餘剩價値も利潤率も亦それに應じて差違を生ずべき筈である。所が今日の實際社會に於いては、決してそうなつてゐない。同額資本の利潤率は、其の資本の構成の如何に拘はらず、常に均一の利潤率を生ずべき傾向を有して居る。而してマルクスが「資本論」第三卷に於いて此の事實を認めたと云ふことは、可變資本のみに依つて餘剩價値の生ずると云ふ第一卷の論據を放擲したことになる。是が福田氏の所論の大要である。

然しマルクス派の側から云へば、第三卷の「平均利潤說」「生產價格說」は決して第一卷の「價値說」『餘剩價値說』と衝突するものではなく、寧ろ其の當然の歸結である。夫を福田氏は「第三卷の說は如何に強辯を用ゆるとも到底第一卷の說と兩立すべきものに非らず」と云つてゐるが、何故に兩立すべきものでないのか、福田氏の說明だけでは不十分である。

「……平均利潤率の謎と稱せらるゝは此の謂にして、マルクスの說は更らに一變して全然第一卷に於ける其の主張を根底より飜したるものなり」と云ふこともマルクスの平均利潤率に關する說明を解剖し批評した後に云ふのなら聞えてゐるが、單にマルクスが「利潤は皆平均に歸着す」と云ふたからとて、夫が直ちに『第一卷に於ける主張を根底より飜したものなり』と速斷するのは甚だ不眞面目である。

マルクスから云へば、第三卷の平均利潤說は、第一卷の論據の當然の歸結である。そして其の當然の歸結たる所以を彼は第三卷に於いて詳細に說明して居る。だから福田氏にして、其の『第三卷の說は到底第一卷の說と兩立すべきものに非らず』と云ふ自說を飽くまで押し通さうと思ふならば、此のマルクス自身の說明を拉し來つて、之を完膚なき迄に批評論駁しなければ駄目である。

予の觀る所に依れば、マルクスは決して第一卷の論據を否定してはゐない。第一卷の價値法則を根據としなければ、第三卷の平均利潤說は何うしても之を說明することが出來ぬ。今左に其の理由を概說して見やう。

三

今こゝに5000の資本があるとする。其の中、不變資本を4100とし、可變資本を900、餘剩價値を900とすると、餘剩價値率は900:900=100%になるが、利潤率は僅々500:900=18%に過ぎぬ。

又た、資本の構成(Zusammensetzung)が異る場合、例へば同額の可變資本と結合すべき不變資本額が夫々異つて居る場合には、各資本の餘剩價値率は同一であつても、其の利潤率は決して同一でない。而して此の資本の構成と云ふものは、生產技術の特質如何に依つて、又その發達程度如何に依つて決定される。マルクスは、資本の價値構成が其の技術的構成に依つて決定せられる場合には之を資本の有機的構成(organische Zusammensetzung des Kapitals)と名け、更らにK:V(即ち不變資本と可變資本との比例)が、社會的平均資本のK:Vよりも大なる時には、

之を資本の高構成と名づけ、夫と反對の場合には之を資本の低構成と名けて居る。而して最後に社會的平均資本の構成と一致せる構成を有する資本は、之を平均的構成と稱んでゐる。（資本論第三巻前篇一二四頁、一四二頁。）

今これ等の三構成が如何樣に利潤率の形成に影響するかを調べるに當つて、予は茲にＡＢＧ三種の企業部門を假定する。Ａは技術上の發達極めて低級なる企業であつて、雇傭勞働者の數多き割合に機械を使用すること極めて少なく、工場の建物なども亦至つて小規模なる企業である。即ち資本の有機的構成の低き企業である。之に反してＢは平均構成、Ｃは極めて高構成の企業であると假定する。

今、說明の混雜を避けるために、此の三種の生產部門に於ける餘剩價値率を各同一と見做し、各部門に屬する資本の轉回期間も亦た夫々同一であると假定する。

此の三企業は一人前の年賃金100の割合で夫々百人の勞働者を雇つてゐる。此の場合若し各企業の餘剩價値率を何れも皆100%と假定すれば、各企業の賃金總額と餘剩價値とは夫々100000に當る。更に各企業の不變資本を夫々『100000』『300000』『500000』とすると、次の表の如くなる。

企業	資本 可變	資本 不變	資本 總額	餘剩價值	餘剩價值率	利潤率
A	100000	100000	200000	100000	100 %	50 %
B	100000	300000	400000	100000	100 %	20 %
C	100000	500000	600000	100000	100 %	16.6 %
總計	300000	900000	1200000	300000	100 %	25 %

即ち餘剩價値率は同一であつても、資本の構成が異れば其の資本の利潤率は決して同一ではない。

然しながら斯くの如き利潤率の差違は決して永く繼續するものではない。何故と云ふに資本家が生產を營むのは單に利潤を收得するのが目的であつて、決して自己の缺乏を滿たすのが目的ではない。隨つて僅々16.6%の利潤しか有せぬＣ企業家は、他に50%の利潤率を有するＡあることに氣付けば、直ちに其方に自己の資本を向けるに定まつてゐる。其の結果Ａは激烈なる競爭の中心となつて、其の商品の生產は著しく膨張する。商品の生產が膨脹すれば商品の價格は又從つて下る。價格が下れば利潤も亦下る譯で、若し利潤が平均以下に下ればＡに投入された資本は漸次に退却してＡの生產は縮少する。從つて價格は再び昂騰して平均利潤率に相應せる程度に達する。

若しＡ企業の商品の生產が需用以下に留り、價格の昂騰が此の平均利潤率に相應せる程度以上に達する時は、利潤も亦た平均利潤以上に上つて、他の企業方面の資本は皆茲に集中して來る。其結果、價格は再び元の水準に沈むのである。

四

資本の有機的構成の不等に依つて生ずる利潤率の不等が遂に平均に歸するのも、要するに全く此の需給作用の結果である。

即ちＣ企業に於いては、利潤率の低き爲め生產が縮少して價格と利潤とが昂騰するが、Ａ企業に於いては之と反對に、生產が膨張して價格と利潤とが低下する。此の運動の結果、各利潤は次第に平均して遂に總利潤率の平均程度に達するのである。

予は曩にＢ企業の資本構成を平均的と假定した。資本の構成が平均的であれば、其の利潤率も亦平均利率を表すものと見做さな

ければならぬ。そこで今ＡＢＣの利潤率を調べて見ろに、

企業	總資本	餘剩價値	餘剩價値	利潤率	利潤
A……	200000	100000	100 %	25 %	50000
B……	400000	100000	100 %	25 %	100000
C……	600000	100000	100 %	25 %	150000
合計	1200000	300000	100 %	25 %	300000

然しながら利潤率が斯く平均するに至ろは、全く商品の價格が其の價値より遠かれろ結果である。今各企業の資本轉回期間を一ヶ年と見做す時は、各企業の年生產物の價値と價格とは左の如き關係を呈することになる。

企業	總資本	餘剩價値	全生產物の價値	利潤	全生產物の生產價格
A……	200000	100000	300000	50000	250000
B……	400000	100000	500000	100000	500000
C……	600000	100000	700000	150000	750000
合計	1200000	300000	1500000	300000	1500000

次に各企業の生產物の數を夫々一萬個とすれば、生產物一個の價値と其の生產價格（即ち生產費用と平均利潤との和）とは左の如し。

	A	B	C
價値………	30	50	70
生產價格………	2	50	75

斯くの如く生產費用（即ち可變、不變兩資本の和）と平均利潤との結合に依れる價格、即ちスミスの所謂自然價格、マルクスの所謂生產價格　(Produktiospreis)　は今日の進步せる資本的生產方法の下に於いては商品市價の水準を成すものであつて、市價は市價に依つて決定せられずして、寧ろ生產價格に依つて決定せらろゝ者の如く見える。然しながら其生產價格は又た結局、價値に依つて決定されるのであつて、價値と價格とが全く無關係だと云へば、マルクスは資本論第一卷の論據を第三卷に於いて全然放擲したことになるが、マルクスは決してそうは云はない。マルクスは『資本論』第三卷に於いて、

『商品の總價値は、餘剩價値の總額を節調し、餘剩價値の總額は又た一般的法則として或は又た動搖の制御者として、平均利潤、從つて又た一般的利潤率の程度を節調するが故に、生產價格の法則は價値の法則に依つて節調される。』（資本論第三卷前篇一五九頁）

と說いて居る。

生產價格をして價値より遠からしむろ主一の原因は、前にも述ぶろ如く、平均利潤であるが、平均利潤は唯々餘剩價値の法則（隨つて又價値の法則）によつてのみ說明することが出來るのである。現社會に存在する餘剩價値の總額と利潤の總額とが全く同一であると見做さなければ、吾人は何故に平均利潤率が與へられた る關係の下に於いて一定の大さを有し居るかを說明することが出來ぬ。

五

予等は平生から福田氏の篤學に對して深き敬意を表して居る者で、殊にマルクスに關して眞面目な研究を試むる日本稀有の學者として、常に同氏の態度を多としてゐる者であるが。然し『續經濟學講義』の一書は、未だ予等マルクス派に何等の痛手をも與ふるに足らぬ者であることを玆に斷言して置く。

綠蔭の家

荒畑寒村

▲啄木遺稿を讀む

啄木遺稿が出た。僕は啄木の歌の愛讀者の一人であり、また啄木の生前、折があつたら會つて見たいと思つて居た。いま、遺稿を繙いて、切に此の感を新たにする。

遺稿の終りにある金田一京助氏の略傳を讀むと、才華煥發、情思奔放、二十八にして逝ける磊落不羈の詩人啄木が半生は、悉く是れ放浪と、不遇と、失業との悲慘なる記錄なるを見る。そして此の實際生活の苦い盃に唇を觸れた啄木の思想は、人生社會に對して何の洞察批判をも有せず、權力階級の組織的暴力の下に、一切の自由を奪はれ、勞力を掠められ、意志を蹂躙せられつゝある平民階級に對つて、何の同情をも感動をも有する事なく、醜惡と、暴戾と、無恥と、殘忍との權化とも云ふべき治者階級に對つて、曾て反抗憎惡の念すら抱ける事なき世の常の詩人文士などとは、必然に異なる處が多かつた。僕は啄木がどれ程まで、吾々と思想を同じうし、感情を同じうし、態度を同じうせんとしたかは知らぬ。然し乍ら啄木の晩年の思想が、非常に社會主義的に傾いて居たといふ事は、曾て噂に聞いた事があるし、またその詩には、非常にそういふ傾向が見えて居る。げに卷頭の『呼子と口笛』の中の詩は、何れかその思想の片影、その人格の現はれでないものがあらうか。

げに、げに、『されど誰一人握りしめたる拳に卓を叩きて、'VN arod!'と叫び出づるものなし。』と叫んだ『果しなき議論の後』の心は、到底ブルジョアシーの青年や、文學を職業とせるものゝ解し難く、知り難き境地である。『人民の裡に！』と叫んで、無智と窮乏の底に苦しめる同胞の爲に戰つた、十九世紀中葉の露國青年の心情を解し、己れまたその經驗を味ふには、此の賤しむべき大日本帝國の青年は、餘りに無關心、無智識、卑屈、怯懦である。若しそれ『ココアのひと匙』の中に、『言葉と行ひとを分ちがたき、只だ一つの心を、奪はれし言葉の代りに、行ひもて語らんとする心を、われとわがからだを敵に擲げ付る心を、而してこは眞面目にして熱心なる人の、常に有つ悲しみ

なり。』と云へる如きは、まさに吾々の心、吾々の感情である。斷じて彼の酒と、女と、無爲より生ずる倦怠の煩悶より外、平民階級の苦惱努力に就ては何の知る處なき文學者の心情では無いのである。

更にその『墓碑銘』と題する一篇を讀め。此の詩が啄木の實際生活より來れるものか、將た單に空想の產物である乎は、こゝに問はんとする處でない。然し乍ら、是は明らかにアナーキストの詩、勞働者の詩である。『われには何時にでも起つ事を得る準備あり……今日は五月一日なり、われ等の日なり。』若し啄木にして、アナーキズムに對する理解を缺き、勞働者の心理に融合する處が無かつたならば、恐らく是等の句は創られざりし筈である。

吾々が曾て因襲と瞞着との爲に盲にされて居た時代に、甚だ熱烈な忠君愛國者であつた如く、啄木もまた一と頃旺んに日露戰爭の肩入などをして居たのが、だんだん社會の實狀を知つて來ると共に、その迷信から醒めて往たメンタル、プロセスが此の遺稿中の文字を通して、　く現はれて居るのが面白いと思ふ。そしてその傾向は『硝子窓』『紙上の塵』『歌のいろ〳〵』等の中に散見して居るが、就中、『卷煙草』並びに卷末の『時代閉塞の現狀』と題する論文の如きは、全く吾々の平生の議論と同じである。

『果てしなき議論の後』『ココアのひと匙』及び『墓碑銘』の三篇は、『啄木遺稿』から引用して、別項に掲げた。

▲啄木の歌と哀果の歌

土岐哀果と、故石川啄木とは親友であつた。そして文學者と稱するもの、隨つて亦、その作物の大嫌ひな僕も、此の二人の歌だけは、常に愛誦して措かないものである。

此の二人の歌は、その格調に於て非常な類似があり、その內容に於て多少の差異が認められるが、然しその差異は、種類の點ではなくして距離の上である。啄木の歌には平民階級の苦惱煩悶といふやうなものがやゝ朧ろ氣ながらも見え、哀果の歌には中流階級の青年の社會の實狀に對して目ざめた悲哀といふやうなものが、可なり濃い色に現はれて居る。そしてその點が、僕の此の二家の歌を

好む所以なのだ。

『啄木歌集』には遺稿中の詩に見られるやうな、アナーキスチックな、反抗的な、強い半面は無い。また世の常の詩人の詠むやうな、戀とか涙とかいふ歌も隨分多いが、それでも、貧乏が何人にも起させるサモしい心、長い單調な勞働から放たれた後のガッカリした心、不如意に會ふ每に、冷然と自ら嘲笑つたり、怒つて叫んだり、默つて泣いたりする心、そういふ感情が些しも飾らずに、極めて大膽卒直に詠つてある。そして是等の歌を見、更に『呼子と口笛』の詩を讀む時、それが全然チグハグなものでなく、やはりそこに一脈の相通ずる點あるを感ずる

實務には役に立たざるうた人と、我を見る人に金借りにけり。
氣の變る人に仕へてつくづくと、わが世がいやになりにけるかな。
友よさは乞食の卑しさ厭ふなかれ、餓えたる時はわれもしかりき。
はたらけどはたらけどなほわがくらし、樂にならざりぢつと手を見る。
とある日に酒が飲みたくてならぬ如く、今日われ切に金をほりせり。
この次の休みに一日寢て見んと、思ひ過しぬ三年このかた。
何事も金金と笑ひすこし經て、またも俄かに不平
貧けたるもわれにてありき爭ひの、因もわれなりしと今は思へり。
赤紙の表紙手ずれし國禁の、書を行李の底にさがす日。
本を買ひたし本を買ひたしとあてつけの、つもりではなけれど妻に云ひて見る。
家に歸る時間となるを只だ一つの、待つ事にして今日も働けり。
いろ／＼の人の思はくはかりかねて、今日もおとなしく暮したるかな。
百姓の多くは酒をやめしといふ、もつと困らば何をやめるらむ。
何故かうかと情なくなり弱い心を何度も叱り金借りに行く。
友も妻もかなしと思ふらし病みても猶、革命のこと口にたゝれば。
やゝ遠きものに思ひしテロリストの、悲しき心も近づく日のあり。

哀果の歌はやゝ趣きが違ふ。彼の歌は飽くまで中產階級の青年の心理、無事に學校を出て、勤め人になつて月給を貰つて居る者の心理であるが、それと同時に自己の畢竟一個の勞働者に過ぎず、且つその日常生活の、極めて非良心的なのを意識し、そして若し、良心の命令に從つて行動しやうとすれば、必然に平民階級の中に來らねばならぬ

と自覺し乍ら、猶そこまで踏み込めぬ、その矛盾と悲哀も亦よく現はれて居る。

ストライキやまんともせぬ恐ろしさ、息をひそめて君を思ふわれは。

働らく爲に生くるにやあらむ生くる爲に、働くにやあらむわからなくなれり。

クロポトキンの『パンの略取』を半ばまで、讀みしがその後讀むひまの無し。

かれら今寒き街路を歸るらむ、日ねもすわれは家に眠れり。

日本に住み日本の國の言葉もて、云ふは危ふしわが思ふこと。

手の白き勞働者こそ悲しけれ、國禁の書を涙して讀めり。

鼻先につきつけられし拳にも、怒り得ぬ如き世渡りをする。

毎日あさ電車に乘りて思ふには、車掌よりわれすこしはよきかな。

働らくはさまで苦しくもあらぬかな、しか思ふやうになりし悲しさ。

ストーブの夜の股火のもの思ひ、かたき椅子にも二年あまりか。

哀しきは職業のあるその事を、幸福とするいまの心かな。

革命の軍歌としての文學詩歌、僕はそんなものは信じない。必要だとも思はない。社會革命は勞働者の力だけで澤山だと思ふ。だから、啄木と哀果とが、(と云つても、一人はもう居ないが)更に進んで全然アナーキスチックな詩人になつたとしても、若し單に文學の上、思想の上、文字の上だけのアナアキストに止まるならば、何の關係もないと思ふ。然し啄木の此の歌を見、彼の詩を讀んだ僕は、啄木がもう些し生きて居たならば、文學に満足する事能はずして、吾々の間に來るか、若くは單獨でか眞に革命運動を起したらうと思ふ。そして今は空しき此の希望を、哀果の前途に繋ぐを得ば、大なる幸福であり愉快である。

■隱遁 (土岐哀果譯)

トルストイが隱遁を實行したのは三年前の冬だつたが、考へて居たのは三十年前からの事だつた。土岐が譯した此の『隱遁』の一册に收めた四篇の物語は、何れか彼が卅年間思ひ惱んで來た、孤獨祈禱の生活に對する憧憬、家族の爲に理想を實行出來難い煩悶、それ等の深い刻印でないものがあらうか。

即ち『神父セルギイ』が、「自ら造つたのでない境遇」に身を置くに安んぜず、榮譽と尊崇とを抛つて巡禮になつて了ふのも、『隱者フイヨドル・クヅミチの遺文』のアレキサンドルが皇帝の位を捨てゝ世捨人となつて了ふのも、『狂人手記』の判事が自分の買つた地所の利潤が、百姓達の苦痛の上に置かれて居るのを羞づるのも、『神父ワシリイ』が母に逝かれた百姓の子達に半ルウブルの金を與へた爲め、家庭に大波瀾を起したのも皆な此の卅年の永い間の、トルストイの深刻な煩悶の片影で無いものはあるまい。そして是等の遺作は、何れも極めて短いものに過ぎないが、其一句一句はトルストイの人が人の上に權力をもつ事の不正、階級が人心を束縛する事の罪惡を非難した議論著述を、さながらコンデンスしたものゝ如くである。隱遁の年の夏のトルストイの日記、卷末に附した仲田氏の論文『隱遁と死』、またトルストイに就て考へさせる處が多い。

自分はトルストイの思想に同ずる者ではない、然し卅年間の煩悶と、八十餘で猶理想に邁進した此の老人を思ふと、嚴粛な感に打たれる。(寒)(定價金七十五錢、小石川區高田豊川町新陽堂)

果しなき議論の後

——『啄木遺稿』より——

故　石　川　啄　木

われらの且つ讀み且つ議論を闘はすこと
しかしてわれらの眼の輝けること
五十年前の露西亞の青年に劣らず
されど誰一人握りしめたる拳に卓を叩きて
'V NAROD!' と叫び出づるものなし。

われらはわれらの求むるもの丶何なるかを知る
また民衆の求むるもの丶何なるかを知る
しかして我等の何を爲すべきかを知る
實に五十年前の露西亞の青年よりも多く知れり
されど誰一人握りしめたる拳に卓を叩きて
'V NAROD!' と叫び出づるものなし。

此處にあつまれる者は皆青年なり
常に世に新しきものを作り出す青年なり
われらは老人の早く死に而して遂に勝つべきを
　知る
見よわれらの眼の輝けるをまたその議論の烈し
　きを
されど誰一人握りしめたる拳に卓を叩きて
'V NAROD!' と叫び出づるものなし。

あ丶蠟燭はすでに三度も取りかへられ
飲料の茶碗には少さき羽蟲の死骸浮び
若き婦人の熱心に變りはなけれど
その眼にははてしなき議論の後の疲れあり
されどなほ誰一人握りしめたる拳に卓を叩きて
'V NAROD!' と叫び出づるものなし。

ココアのひと匙

われは知るテロリストの
かなしき心を——
言葉と行ひとを分ちがたき
たゞひとつの心を
奪はれたる言葉のかはりに
行ひもて語らんとする心を
われとわがからだを敵に擲げつくる心を——
しかしてそは眞面目にして熱心なる人の常に
　有つかなしみなり。

はてしなき議論の後の
冷めたるココアのひと匙を啜りて
そのうすにがき舌觸りに
われは知るテロリストの
かなしきかなしき心を。

墓碑銘

われは常にかれを尊敬せりき
しかして今も猶尊敬す――
かの郊外の墓地の栗の木の下に
かれを葬りてすでにふた月を經たれど。

實にわれらの會合の席に彼を見ずなりてより
すでにふた月は過ぎ去りたり
かれは議論家にてはなかりしかど
なくてかなはぬ一人なりしか。

或る時彼の語りけるは
「同志よわれの無言をとがむることなかれ
われは議論すること能はず
されど我は何時にても起つ事を得る準備あり。」

「彼の眼は常に論者の怯懦を叱責す。」
同志の一人はかくかれを許しき
然りわれもまた度々しかく感じたりき
而して今や再びその眼より正義の叱責を
受くることなし。

かれは勞働者――一個の機械職工なりき
かれは常に熱心に且つ快活に働き
暇あれば同志と語りまたよく讀書したり
かれは煙草も酒も用ゐざりき。

かれの眞摯にして不屈且つ思慮深き性格は
かのジュラの山地のバクウニンが友を偲ばしめたり、
かれは烈しき熱に冒されて病の床に横はりつゝ
猶よく死に至るまで譫語を口にせざりき。

「今日は五月一日なり、われらの日なり。」
これかれのわれに殘したる最後の言葉なり
その日の朝われはかれの病を見舞ひ
その日の夕かれは遂に永き眠りに入れり。

あゝかの廣き額と鐵槌の如き腕と
而してまたかの生を恐れざりし如く
死を恐れざりし常に直視する眼と
眼つぶれば今も猶わが前にあり。

彼の遺骸は一個の唯物論者として
かの栗の木の下に葬られたり
われら同志の撰びたる墓碑銘は左の如し
「われには何時にても起つ事を得る準備あり。」

逍遙先生の反譯振（續）

貝塚澁六

▲前號に續いて今少し『ウオレン夫人の職業』中から變な所を拾つて見る。然し其前に一つ大いにあやまつて置かねばならぬ事がある。

▲前號に、譯文の第一幕及第二幕の左右が違つて居ると書いて置いたが、其點は跡でよく考へ直して見ると、却つて僕の方が間違であつた。即ち Looking up the hill といふのは、矢張り見る人の位置を示したのであつた。尤逍遙先生が「丘を見上げると」とせられたのは矢張間違で、『丘に向つて立つと、左手に家が見える』といふのが本統の所である。第二幕の書割の所でも、先生の譯文には now の字が譯して無いので、非常に意味が曖昧になつて居る。然し何にせよ、此點に就いては、僕は謹んで御詫いたす。僕は此間違に氣がついた時、早速讀賣新聞に『誤譯指摘の遣損ひ』と題する詫狀を載せて置いた。

▲拙譯文第一六頁の所。ギャーが、今年五月にロンドンに行つて、法律家の事務所で六週間を過した事を話すと、ブレードが「おやく〜それで以て貴孃は藝術を味つたとおつしやるんですか」と云ふ、するとギャーが『一寸待つて下さい。それが始ぢやなかつたんです。わたしはフイツジョンス街のある藝術好きから招待されて市へ行きました云々』と云つたとある。そこの原文は左の如し。

Wait a bit. That wasnt the begining. I went up to town on an invitation from some artistic people in Fitzjohn's Avenue.

『それが始ぢやなかつたんです』とは、如何にも原語其儘であるが、意味は極めて不明瞭である。又『市へ行きました』とは何處の市へ行つた事やら少しも分らぬ。僕の考では、此一節は『お待ちなさい。まだ其前があるんです。私はもと〜藝術家連の招待で上京したのでした（即ちロンドンに行つたのでした）』と云ふ意味だと思ふ。

▲第二一頁九行目『それに貴孃はつけ〜とおつしやりかれない』 Besides, you may be too bold. 是は『あなたも少し口が過ぎませう』といふ樣な意味だと思ふ。前後の關係を委しく書くと長くなるから略して書くが、篤志の方はよく見合せていたゞきたい。

▲第二二頁二行目『貴下が知らして下されば勝てるわ』 you may back me to win もおかしい。知らして下さると否とに係はらず、ギャーは必勝を期して居る。こんな事を云ふ筈が無い。此 back は bet の意味で、『あなたは私の勝に賭けても宜しい』即ち『私は必ず勝つて見せる』といふ意味だと思ふ。

▲第三三頁八行目『よし親父が有り得たにもしろ、口へ出しては有つたとは言はない』是は如何にヒイキ目に見ても名文とは云はれまい。そして she would deny that it (the child) ever had a father if she could. といふ原文を、どうしてそんな妙な事に譯したか想像がつかぬ。是は『若し出來る事なら其子に父親があつたと云ふ事すら彼女は否みたいのだ』といふ意味だと思ふ。

▲第三六頁一行目『此邊の者を知つてゐるんですか』の原文は Do you know the people here? である。『此邊の者』ではなくて、『此家の人々』である。

▲第八八頁五六行目の邊に、原文 to her（自分に）といふ言葉が落してあるので、其邊全体の意味がハツキリせぬ。くだ〜しいから委しくは書かぬ。

▲第九五頁九行目以下『一週二圓で以て相應な服裝もし、貯金もすることが出來るかい？出來まい。勿論さ、若し標致がわろくて、他に儲道がないとすればれ。が、若し音樂とか劇とか新聞書きが出來るといやあ別さ』

Could you save out of four shillings a week and keep yourself dressed as well? Not you. Of course, if your a plain woman and cant earn anything more;

er if you have a turn for music, or the stage, or newspaper writing; thats different.

僕は of course から以下をこう譯したい。『尤も、器量が惡くてそれ以上どうしても儲からないとか、或は音樂なり、芝居なり、新聞書きなりの器用でもあるとすれば、それは又別の話さ。』

▲第一〇四頁二行目『ぢやあお前は逆ふ積りでゐたんだれ』So it has been the other way. 是はチョット代りの譯語が思ひつかれぬけれど、間違は確かに間違だと思ふ。

▲第一二八頁三行目『予はクロフツ夫人を取定めたいんだ』 I want to settle down with a Lady Crofts. 第一三〇頁八行目『商賣仲間』business partner. 第一三二頁末行『支配人頭』managing director. 第二三八頁二行目『貴下とわたしとは利潤仲間でしたのよ』 I have shared profits with you. 第一四一頁十行目『獵師らしい』sportsman-like など、こんなのを數へれば幾らでもある。第四幕はモウ見ずに置く。

▲序でに、ショウ傑作集の第二篇『武器と人』(坪内、市川、共譯)をチョット見たが、是は第一篇に比べると、一体に文章が引締つて、遙かに善く出來て居る。

『人と超人』誤譯指摘

▲『かれ子』といふお方から『六月號の「人と超人」を原書と引くらべて見』たといふ非常に面白い有益な手紙が來た。

▲先づ第一に二四頁上段二行目の終に『あの子もまだ若い。是からユックリ何とでも出來るのだから』といふ丈の言葉が落ちて居た事を注意して下すつた。然しかれ子君は之を『そんなに急くこともあるまい』と譯して居られる。原文は Shes very young: and theres a time for everything である。是は其實、僕もまだ少し頭を傾けてゐる。

▲次に同頁上段十行目『持物』equipment を『衣裳』又は『仕度』と改めよと教へられた。僕は寧ろ『裝ひ』と改めたがよいかと思ふ。

▲次に同頁上段末行『誕生日のお祝』では誰の誕生日だか分らぬから『お誕生日のお祝』とすべきだと私共女子は考へますとの仰せ。然し『お』の字を加へても矢張りどちらの誕生日だかハッキリとは分らぬ。正直のところ、僕は此の原文に對して、どちらの誕生日だか判じかねて居る。

▲次に同頁下段一行目には『台所』と書き、二六頁下段一九行目には『女中部屋』と書いた事を難ぜられた。原語は house-keeper's room. 是は謹んで台所を取消し升。

▲次に第二七頁下段七行目『少し負けて上げます』は『少し酌量して上げます』となさいとの仰せ。如何にもミス・ラムスデンの氣質から見て『酌量』といふ言葉の方が適切です。謹んで訂正し升。

▲次に同頁下段『皆さんをこんな妙なハメにして』は『苦しいハメ』とすべきだとの事。異存なし。

▲次に第二五頁三行目『無茶な事を云つて呉れなとなだめる樣に』は『促すやうに』とあるべきだとの事。僕は『賴む樣に』の方がよいかとも思ふ。

▲最後に『我々の恥辱は實に極點に達した』は、あまりエンフアチックな言振だとの御批評です。實はここの原文 The cup of our ignominy is full の意味は、僕には十分分りかねる。猶諸君の御教示をねがふ。

▲以上かれ子君の御來示、一々肯綮に當り眞に愉快に堪へず。謹んで謝す。

▲猶かれ子君は『日本に於ける新思想界の人として、老人組では先生と與謝野寬樣が大好で、若手では大杉榮樣と武者小路實篤樣と平塚明子樣とが好です』との事。是等當世賣れッ子諸君の中に僕の名を加へられた事は誠に光榮の至に存ずるが、然し無殘にも一點の容赦なく『老人組』と肩書されたのには、與謝野君と共に、窃かに長大息を發せざるを得ざる次第である。(澁六)

中村星湖君に答ふ

安成貞雄

中村君、僕は早稻田文學の六月號を見て正直な所少し驚いた。大抵僕等と同感だらうとプレツユームしてもよからうと思はれる君から『これは安成君に御尋ねするが』と云はれて、またフアウストを論ずる事にならうとは夢にも思はなかつた。併しそんな事はどうでもいゝ、兎に角御尋ねに御答へする。

中村君、君は『帝劇で演出された場合でも、何故ロマンチツクのラヴストーリーを織り交ぜたのが惡いのか』と尋ねられたが此の御尋ねは當を得てない樣に思はれる、少なくとも引用法が不當である。是の御尋ねだけで見ると、僕が、單に或物にロマンチツクなラヴストーリーを織り交ぜるのが惡いと云つた樣に聞えるが、僕はさうは云つた覺がない。僕は『その方(近代文學の中から發見し得べき例)が、西洋手品と、お伽噺と、ロマンチツクなラヴストーリーとを織り交ぜた傍白澤山のフアウストよりも『吾々に痛切に共鳴する』と云つて居る。即ち、僕は、フアウストは、西洋手品と、お伽噺と、ラヴストーリーとを織り交ぜた傍白澤山のものであつて、近代文學中の或物ほど吾々に痛切に共鳴しないと云つたのである。であるから、此の場合、僕が、西洋手品、お伽噺、ロマンチツクなラヴストーリーと三つ並べた中で、特に最後のものゝ價値如何を明かにして居ないに係らず、それだけを引用して、それが何故惡いと云ふのは不當である。中村君、斯う云ふ引用法が許されるならば、西洋手品を織り交ぜたのが何故惡い、お伽噺を織り交ぜたのが何故惡いと云ふ引用法も許されなければならぬわけであるが、それならば、僕は、御答へが出來ないと云ふより仕方がない。

然しながら、中村君、若し君の御尋ねがロマンチツクなラヴストーリーでも惡くはない筈ではないかと云ふのならば、僕も、惡くはないと御答へする。正直の所、フアウストの中で、一番面白かつたのは、あのロマンチツクなラヴストーリーであつた。第一僕は、はじめから、『惡い』などゝは、一度も云つた事がない。近代文學の中から發見し得らるゝものほど痛切に共鳴しないとしか云つて居ない。中村君、是れには君も御異存がない筈だと思ふ、何故と云ふに君も『世間で擔ぐ程大した作でない』と居つて居られるから。

是で中村君にこちらから御尋ねする。世間のフアウストを擔ぐ人は、フアウストに滿點百點を與へたものとし、僕は、十點を與へたものとすれば、『世間が擔ぐ程大した作でもないが、兩君が云はれる程愚劣な作では決してない。』と云はれる君は、當然、百點と十點の間の點數を與へられるわけであるが、今假に百點を與へた人の評を『ゲーテの客觀的觀照の驚くべき能力は、彼をして人間精神生活のすべてを經驗せしめ、しかも其の一局部に凝滯しないので、再びそれを見しめたのである』と云ふ言葉で代表せしめ、十點しか與へない吾々の評を、『極めて愚劣なものだからである』『源水の水藝、天一の手品、それに幻燈もあれば、お伽芝居もある。十五歳以上の人間が見て人間とか宇宙とか云ふものにブツカラからないが云々』と云ふ言葉で代表せしめるものとすれば、百點と十點の中間の點數を與へる君の評は、どんなものであらう。僕は君にそれを聞き度いと思ふ。さう云ふ心は一つには、君が百點を與へない理由、即ち値の標準を知り度いのと、も一つには、

その評が、誇張なしに出るものであるかどうかを見度いからである。

中村君、『物を視るに、價値を向ふの物に見出さうとするのが間違つてゐるではないか』と云ふ御意見に對しては、大變幼稚だが、此の場合、『向ふに物がなければまた價値の問題もない』とでも申上げて置く。

中村君、近代思想社の連中にも、女の尻を追ひ廻すものもあり、女に追ひ廻されるものもあり、洒落本を讀む位の閑日月を有するものもあるが、不幸にして、其生活の批評をする事は、御承知の通り、許されて居ない。それとも早稻田文學が載つけて吳れるならば、同人は多分喜んで御傾聽を願ふだらうと思ふが。

■　荒畑寒村

中村星湖君、皆なして同じ事を云ふやうだが、僕も些し云ふ。僕は、同人中、君から第一番にお叱りを蒙むつた人間だつたから。

僕が惡口を云ふとて攻擊した君の態度を僕は甚だ面白く見受ける。僕の屢々云ふ如く、君等文學者は意識的にか無意識的にか常に現在の權力者たる資本家階級の爲に、讃美頌榮謳歌防護の詩文を綴り、そして現在の制度組織、及び之に附隨隷屬する一切の物に、反抗嘲笑憎惡破壞の態度を執る者を攻擊しつゝあるのである。君等は偉さうな顏をして、人生だの藝術だのと云つて居るが、その實際のロールは、是れ以外何ものも無いのである。

そこで僕は、君が此の文學者の小說や、紳士閥青年の演劇の惡口を云ふ僕を、目クジラ立てゝ誹難攻擊される態度をば、甚だ道理な、如何にも職務に忠實な所以と、失禮ながら見受けたのである。然し君は何故近代劇協會のフアウスト劇を惡口した僕を責める前に、ゲーテのフアウストに加へた僕の(大体の骨子はヒツチのだが)批評に就て云はないのか。何故君は、僕に惡口される君の徒黨の小說を辯護する前に、幾度か文學者の根本的謬想を指摘した僕の議論に答へないのか。君が惡口だと云ふのを、イヽヤそうじやないとは申しませんだが、僕は尠くとも惡口を云ふに理由を擧げて居る。然るに君が、辯駁するのに理由も擧げず、『世間で云ふ程の傑作でもないが、諸君の惡口する程愚作でもない。』と云ふやうな曖昧な態度を執つて居るのは卑怯である。況んや『價値を對象にのみ求むるのは間違ひだ』などゝ、利いた風を並べるのはコケ嚇しと云ふものだ。如何に君でも、マサカ君の小說と講談本とに、同じ價値があるといふほど自惚れても居まい。

最後に、『近代思想の同人でも女の尻を追ふ者もあるだらう』と、大變皮肉らしい書き方を君はして居たが、是は惡口ではないのか。それ共、こういふ上品な惡口なら差支へないと云ふのか。ハツキリした返事を要求する。

■　大杉榮

『諸君自身の生活をも批評されたならば或は私などもも傾聽する事が出來やうかと考へる』と君は云ふ。

しかし今迄の此の雜誌には、僕等の生活の批評が少しも現はれてゐないか。次によしそれが君の眼に映じないとしても、僕等がいつも力說してゐる社會批評は、なぜ君をして傾聽せしめ得ないか。最後に自己批評と社會批評とはどんな關係のものか。

此三點に就てなんとか敎へて戴きたい。

これは別の事だが、前號の『征服の事實』に對して、本間久雄君が讀賣新聞で批評をしてゐる。本號の『生の擴充』は幾分かそれに答へてゐるつもりである。

仲木の虚無黨劇

寒村

創作試演會で、仲木の露西亞の虚無黨を取扱つたものをやるといふから、二度觀に往つて、實は二度ながら失望した。

「空中の悲劇」は陸軍大尉マシキッチといふテロリストが、自分の飛行機に同乘した太公を、空中で暗殺しやうとして果さず、黨員からは背叛者と認められて遂に飛行機で自殺するといふ筋。「脱獄の朝」は有名なテロリストの首領、アレキサンドル・ゲルシユニの脱獄を仕組んだものである。一體此の作者の癖と見へて、「空中の悲劇」にしろ、「脱獄の朝」にしろ、マシキッチの乘つた飛行機が暴風にもまれて墜落する光景や、ゲルシユニを乘せた馬橇がやつて來るのを、他の人に家の内から眺めさせて説明させて居る。即ち觀客は、眼から印象を受けないで、耳で聽いて更に想像せねばならぬ。こうやるには、餘つ程役者が巧くないと――試演會の役者は甚だ拙かつた――到底成功しそうも無い。然しこんな事は、僕には如何でもいゝので僕の覘はんとしたのは實は外に在つたのだ。僕は初め作者がどの位迄、テロリストの思想感情を解して居るか、如何なる程度に、その信念行爲を表現し得るか、それを見やうと思つた。が、作者は此の點に於て、殆んど全く理解を缺いて居たと云つてもいゝ。

「空中の悲劇」の主人公マシキッチは、黨から太公暗殺の命令を受けて、飛行機に同乘するのだが、その遂に失敗した理由として同志ペトロキッチに語る處によると、『空中に上つては、迚も普通の殘虐な心は起らない……太公も空中に在つては、實に善人になつて了つたのだ。平常の我等を虐げる人とは丸で違ふ人になつて了つたのだ。それと云ふのも何の汚れもない清い空中に在つて、下界の美はしい色彩を眺めて居ると、誰でも自づとそうなつて了ふ」のである。

然しいくら空中に上つたからとて、下界に居る時と急に思想が變化するといふ事は、心理學的若くは生理學的に證明されない限り、到底僕には信ぜられぬ事である。へいぜい殘虐な太公とても、いくら極悪非道の人間だからとて、空中に上る迄もない、下界に居た處で、そうそう悪業の仕續けで居る譯が無い。そん事位で「平常思つて居るやうな殘虐な企てを實行する事は出來ないのだ。そんな心は空中に入る時に、既に消へ去つて了ふ」ほど、テロリストの信念は薄弱なものでなく、その事業は遊び事ではないのだ。

千九百六年少將ミンを暗殺したコノプリアンニコワは、『妾がミンを殺したのは、彼が自由の先驅者を殺し、無辜の血をモスクワの街に流したからである。……今や新しき權利、汝等の非人道的な權利よりも、更に正しき人民の權利は現はれつゝある。』と法廷に述べた。千九百三年、サゾノフが内務大臣プレベを暗殺した時、革命黨が發した宣言書は、プレベを死刑に處する理由六ケ條を擧げて居る。實にクロポトキンが「アナアキストの道德」の中に論じて居る如く、文明と人道とに反するタイラントを亡すのは、空中へ上れば消へて失なるやうなシヤボン玉ではなく、テロリストの道德であり、良心の命令であり、怯懦に對する人間感情の勝利なのである。「一旦飛行を始めると……地上の美を觀賞する一個の藝術家になつて」しまふ程、脆く薄弱な信念しか有たない人間は、恐らく初めからテロリストとはなれなかつたらう。『脱獄の朝』の中で革命黨の青年と娘が『人道や主義の爲に戰ふ私達は、自個の幸福等といふ物は、

全く犠牲にしなければならないのですれ、何たる悲しい事でせうか。』『そんな事を考へると、何故この黨になぞ入たのだらうかと、貴方の前だけの話ですが、時々思ふ事があるのです。』と談り合ふ。是なぞも作者がセンチメンタルな色を附け過ぎた嫌ひがある。藝術家くさくてテロリストらしくない。感情が餘りに軟弱で、毫も思ひ詰めた、沈痛な、剛毅な、白熱的な處が見えない。況んや、流石の裁判官をして『實に人物だ！』と感嘆せしめたゲルシユニが、『このやうな暖かい樂しい家庭に住んで居たら、革命等といふ恐ろしい考へは起さんですむだらう。』と云ふに至つては、僕は作者の健在を疑はずには居られない。

或ひはテロリストだつて、意志の弱い、感情の脆いものもあるかも知れぬ。また、實際はさうあらう共、作者の考へた通りに書いて構はぬ筈だといふかも知れぬ。外の事はそれでいゝかも知れぬ、然し尠く共この場合だけは、作者がテロリストの思想感情を理解しないといふ事は、直ちに是等の作のウイケスト・ポイントをなして居るのである。出て來る人物が、皆「テロリスト實は日本の青年文士」と云つたやうな性格ばかりである。即ち是等の劇の失敗は、マシキツチ大尉の馬鹿々々しい煩悶や、脱獄して來たばかりのゲルシユニが、すぐまた飛び出して行くやうな技巧上の缺陷ではなくして、實に作者がテロリストの根本的精神を理解しなかつた點に基くのである。

■七死刑囚物語 (相馬御風譯)

□アンドレイエフの七死刑囚物語を、自分が初めて英譯で讀んだのは、大逆事件に連坐した同志が處刑された當時、神奈川の舍兄の家に假寓して居た時であつた。大佐夫妻が息のセルゲイに面會に來て、父と子とが最後の接吻を交すのを見て、母親が嫉んで怒る……あそこを讀みながら聲を上げて泣き出したので、家人が吃驚した。いま相馬君の邦譯を讀み返しても、セルゲイが父のフロツクコートを見て、『お父さんには今は從卒はない、すると自分で自分の着物を拂はにやならない譯だ。』と思ふ處や、愈々絞刑場に行く時『僕は何ともないよ、僕だつてしつかりしてるサ。』と、『永い間の哀訴の後に、墓石が放り出したやうな返答』をするワシリーや最後まで『死ぬなア嫌だ、俺ア殺される譯れえだもん。』と強情を張つて居る百姓のヤンソンの事を讀むと、胸が一杯にならずには居られない。原著書が本書を著はした目的は、死刑は如何なる條件の下でも恐ろしく且つ不公平だといふ事を示さんとするに在るのだといふが、僕は正直なる人間は、必ず此の物語に據て、何故に此の『恐ろしく不公平なる』組織が存在せればならぬかといふ事を考へさせられるだらうと思ふ。

□アンドレイエフの此の作が、隨分センセーショナルな題材を取扱つて居るにも拘はらず、極めて嚴肅な人生に觸れた、深い内容をもつて居るといふ事は、譯者も引いて居るモリス、ベエリング氏の說のやうに、露西亞の作家が、眞に人生に對して深い同情と理解とを有して居る結果であらう。（寒）

（金四十五錢神田區南神保町海外文藝社）

■心の扉 (昇曙夢譯)

ザイツエフの姉、客、狼、及びアンドレイエフの獸の呪ひの四篇を收めて居る。ザイツエフが露國の文壇にどういふ位置と主義を有して居るかは知らぬが、客の中に顯はれた警察官に象徵させた社會制度に對する憎惡、神秘と憧憬とに平和と同情とを索むる厭世的觀念、さういふ處に作者の人生觀が窺はれるのではあるまいか。狼に至つては譯者は、憎惡爭鬪の結晶の如き人生を厭ふ作者の人生觀を示したものだと云つてるが、然し自分は却つて、此の一篇に青年の勝利、先驅者の殉道、さういふやうな意味を見出すのである。（寒）（同上）

一本のマッチ

徳永保之助

『あなたはそこで、そんな暗い部屋の内で、
何をしてゐらつしやるの？
うろ／＼と、何かさがし物でもするやうに、手
さぐりをして。――
あかりでも點けたらいゝぢやありませんか。』
『たつた一本のマッチを見えなくして了つたん
だ。
ちよつと待つてくれ――』
冷い暗の中に、
いいい
あちこちする人のけはひ、
それに連れて、ガサ／＼音がする。
『あたしも手傳つて、
さがして上げたいんですけど、
部屋の内が、かう暗くつちや、
何んにも分りやしないワ！』
かう云つたきり、
女は默つてしまつた。
ゐるんだか、ゐないんだか、
そよとのけはひもしない。
『たしかにこゝへ置いたんだが――
待つてくれ、今捜すから、
待つてくれ、待つてくれ！』
早くあかりをつけて、
女を部屋へ入れたいと、
そして女の顔を見たいと、
男はあせる。
無暗に疊の上を、
手で撫でる、耳ざはりの惡い音！

わが脊

われは何事も知らず。
たゞ少し、われはわが脊を知る。
わが脊は弓なりにまがりたる、
猫脊にはあらざれど、――
いろ／＼の蟲の巣ひて、
その針をもてわが神經を刺す。
無氣力の灰色虫、血を吸うて止まず、

憂鬱の鉛色の虫、わが心臓を貪りくらふ。
臆病と小心と、
二つの似よりたる黒く小さき虫、
わが進まんとする足をしびらしむ。
すでに因循の蛆虫は、
わが腦にのぼらんとす。

（たゞひとり、悲しみの虫のみは、
わが靈（たましひ）の内にやどりて、
われをして、
絶えず涙にむせばしむ！）

われは身を横へて、
もだへ、苦しみ、泣き叫べど、
わが醜くも忌しきものを負へれば、
人はわが脊をあざわらへり。
あゝわが皮膚に、
燃ゆるべき脂肪のあらば、
火をつけて、
自ら焚けて死すべきを！

敵の中にて

（ニーチエが批評家に與へしもの）

こゝに絞首臺、
そこに繩と刑吏の赤き髭あり。
眼つき惡き群集はとり巻けり。——
毫もわれに目新しきものなし、
この光景を、
幾度かわれは見たり。
汝等の前にあざ笑ひつゝ我は叫ぶ。
『われを縊らんこと、空しき極みなり。
死すとや？
否、否、我れは死せざるなり！』

みな汝等は乞食なり！
汝等は我れを、
汝等の贏ち得ざるものを有つ我れを羨む！
げに我れは苦痛にもだゆ。
されど汝等には、——
汝等のライフは終れるなり。

幾度かわれは死の前に立てりき。
されど我れは蒸氣なり、光なり、息なり、
われを縊り殺さんは、いと空しきこと。
死すとや？
否、否、われは死せざるなり！

悲鳴

和氣律次郎

『悲鳴は藝術だらうか？』。
『え？』。
棠三は思はず香川の顏を見た。餘りだしぬけだつたので、どういふ意味か鳥渡分り兼ねたのである。
二人は銀座のサイドウォオクを日本橋の方へ並んで歩いてゐる。歌舞伎座を出てから築地の河岸つぷちをブラついた末、三十間堀の緣日をひやかしたので彼是もう十二時すぎである。柳並木はしつとりと夜露に濡れて靑い瓦斯燈の光りにおだやかな影をペエブメントの上に落してゐる。
梅雨に這入つて間のない六月十八日の夜。
香川は暫らく答へなかつたが軈て再び口を開いた。
『悲鳴は果して藝術だらうか？ 例へば一人の若い女が夜更けに人通りの少くない淋しい所を通つてゐる。と、不意に闇中から亂暴者が現はれて女に抱き付いたとする。大抵な女は「キヤツ」とか「アツ」とか悲鳴を擧げて逃げやうとするに違ひない。この女の悲鳴は藝術と云へるであらうか？』。
歩きながら二人は顏を見合はした。棠三は默つてゐる。
『吉右衛門の藝術は胸奥に徹底するの力があるとか、人生の中核に觸れてゐるとか云つて甚く感服する人々があるが、私にはどうも贊成が出來ない。あの人の演技は一言にして云へば悲鳴の結晶だ。地震加藤をやつても馬盥をやつても絕えず舞臺で悲鳴を擧げつゞけてゐる。若し吉右衛門の演技が藝術なら女の悲鳴も藝術だ。然し悲鳴は果して藝術だらうか？』
二人は京橋へさしかかつた。雷門行の赤電車が凄まじい勢ひで橋の上を行き過ぎた。棠三は初めて口を開いた。
『吉右衛門論もいゝが一体これからどうするつもりだ。もう電車はなくなつたぜ』。
『夜道に日は暮れないから安心し玉へ』。と、香川は答へる。『それよりも悲鳴非藝術論に對する意見を伺はうぢやないか？』。
銀座に柳並木の影を踏んで來た二人は今日本橋通りのサイドウォオクに銀杏並木の影を踏みながら步いて行く。
不圖ある心持に襲はれた棠三は暫らく默つて何事かを考へてゐたが軈て口を開いた。
『私も悲鳴は藝術でないと思ふ。然し――君は女の悲鳴を聞いた事があるかい？』。
『いいや不幸にして未だ一度も聞いた事がない。女ごころか男の悲鳴も聞いた事はないんだ』。
『さうか。私は生れてから今迄に二三度聞いた事があるが中々凄いものだよ。然し何所で聞いたかといふ事は今でも覺えてゐるが他の事はすつかり忘れて了つた。が、悲鳴といふ言葉にでくわす度に思ひ出す事があるんだ。それは曾て間接に聞いたある女の悲鳴だ』。
『間接に聞いた女の悲鳴といふのは？』。香川が訊く。
『それには鳥渡したエピソオドがあるんだ。若し君が聞いてくれるなら步きながら話さう』。斯う云つて棠三は香川の顏を見た。香川は默つて點頭いた。そこで棠三は話しだした。
「然し私は君のやうな小說家でないから肉を付けて面白く話す

ことは出來ない。唯事件の梗概を話すのだから、その積りで筋以外の事は勝手に想像して貰ひ度い。

四五年前――私が未だ丸の内の新聞社にゐた時の事だが、四月下旬のある日の午後、田町の先生を訪問した。すると先生はお留守で、奥さんのお話で、多分F――町藝者の演藝會へ行つたでせうといふ事だつたので、早速F――町へ出かけて行つた。

どんよりと曇つた日で新見附から牛込見附へかけての土手には若草が生々と葉を延ばしてゐた。招魂社の櫻はもうすつかり散つて了つて、唯池の畔に遲咲きの八重櫻が二三株僅かに行く春の名殘を偲ばせてゐるのみであつた。

會場は萬源といふ料理屋で顏馴染の家であつたが一人で這入るのがキマリが惡かつたので、懇意な待合へ行つて女中を一人借りて一緒に來て貰つた。もう番組も半分以上すんだ所で二間打ち拔いた二階の大廣間には見物がギッシリ詰まつて廊下迄溢れてゐる。爲方がないので廊下に立つたまゝ肩と肩との間から舞臺を眺めた。舞臺では若い藝者が「汐汲」かなにかを踊つてゐたが、その中に踊がすんで幕になつた。女中は席をこしらへに立つて行つた。私は手摺にもたれてボンヤリ庭を眺めてゐると、だしぬけに「ヤア」と云つて肩を叩いた人がある。振り向くと、田町の先生で側には小菊がゐる。小菊と云ふのは先生の古い馴染なんだ。

「今お宅へ伺ひますと多分こちらだらうと云ふのでやつて來ました」と云ふと、先生は「それは失禮。眞鍋や安田も來てゐるよ」と云はれた。と、そこへ眞鍋と安田とがやつて來た。その中に幕が開いたので私も皆んなの中へ割り込んで一緒に見物してゐた。

「壺坂」だの「お輕勘平」だのといふやうな何所のお淺へ行つても屹度出る義太夫だの踊だのを見物してゐる中不圖小菊の直ぐ後に座つてゐる若い藝者の顏が眼に這入つた』。

こゝで棠三は話を切つた。二人は丁度丸善の前を歩いてゐた。軈て棠三は語り續ける。

『今になつて考へて見ると、その女は素人臭いもりつこみたいな女だつたんだが、その當時はやつと藝者遊びを始めたばかりのアマチュアだつたから、その女のほつそりとした身体つきや黑眼勝ちのパッチリした眼付に一も二もなく參つて了つたんだ。そつと小菊に訊くと松の家の姫松といふ子だと敎えてくれた。その中に先生がゐなくなつた。それと同時に小菊も消えて了つた。私も何處かへ行つて姫松を呼ばうといふ考へがあるから眞鍋や安田に別れやうとしたが、何うも好い機會がない。とうとう三人で飯を喰べやうと云ふ事になつて新道の鳥屋へ這入つた。すると眞鍋が「先生や小菊を招待しやうぢやないか?」と云ひ出した。多分櫻家だらうといふので電話を掛けると「折角だが今飯をすました所だから」と云ふ事だつた。眞鍋は「では一つこちらから押掛て行かうぢやないか」なぞと主張したが私は極力反對した。それではこちらの計畫がオヂヤンになるからられ。

軈て飯を喰つて了うと眞鍋は「これから下谷へ行かう」と云ひ出した。安田は「下谷迄は大變だから赤坂へ行かう」と云ふ。私は勿論どちらへも贊成しない。兎も角も外へ出た上できめやうと云ふので鳥屋を出たが、又押問答をするのが厭だつたので眞先きに外へ出るが早いか私は橫町の路次へ逃げ込んだ。眞鍋と安田とは大きな聲で何か怒鳴つたやうだつたが、それにはかまはず首尾よく二人をまいて了つて一人で花の家といふ待合へ上つた。

姫松はぢきにやつて來た。初めての女としは如何にもバツが悪いので、知つてゐお酌を二人呼んで皆んなで蜜豆をたべたりお汁粉をたべたりして他愛もなく時間を費した。私はその晩花の家へ泊つた。女かい? 無論不見轉なんだからね』。

二人は日本橋の上に足を止めた。丁度上汐だと見えて橋の下には黒い水が漫々と湛へてゐる。瓦斯や電燈によつて造られる白、靑、赤種々の光が黒い水の面に雜然と反射して複雜な屈折を描いてゐる。二人が歩き出すと同時に棠三は再び話し出した。

『大分長くなつたからこのあとは出來るだけ簡單に話さう。それから一ケ月餘り私は繁々とF――町へ通つた。三度目か四度目に姫松が「花の家は少し工合が悪いから他の家から呼んで下さい」と云つて山月といふ待合を紹介してくれた。この家は花の家なぞから見ると大分格が悪かつた。その中に不圖女がある大學生に熱くなつてひど工面をしてまで嫥曳をしてゐるのが分つた。

職業柄早速調べて見ると其男といふのは帝大の法科にゐる川瀬といふ男で鳥渡河合に似たいゝ男だといふ事が分つた。それだけなら別に何んでもないんだが、この川瀬といふ男は私の兄――今郵船會社にゐる――の友人で私もよく知つてゐる男なんだ。何んだか斯う馬鹿々々しいくすぐつたいやうな氣がし出して追々足が遠くなり、とうとうF――町へ行かなくなつて了つた。

それから二三ケ月後本郷の通りで不圖川瀬に出合つた。一つからかつてやれと思つたので「F――町の姫松といふ女があなたによろしくと云つてましたよ」と云ふと、川瀬は「へえ、さうですか、もう二三ケ月も會ひませんが未だF――町にゐるんですか?」と不思議さうな顔をした。

もう愈々おしまひだ。その翌年の春私は丸の内を止して銀座の新聞社へ這入つた。這入つて間もなく夜の編輯になつた。すると八月の末のある晩十時頃だつたと思ふ。最終便の通信を調べてゐると不圖姫松といふ字が眼に付いた。オヤと思つてそれを讀み返へすと「薄情藝者の悲鳴」といふ見出しで四十行餘りもある長い通信だ。「本日午後九時頃、神樂坂の縁日に人の出盛る最中突然消魂しき悲鳴を擧げて毘沙門境内へ逃げ込みたる女あり一人の男追ひ縋がり女の髮を攫み毆打せんとする所を警官出張取押へ神樂坂署に引致取調べたるに女は同所藝者屋吉川家方抱へ吉奴(十九)男は同人の情夫なる××座囃方山田末吉(卅二)と判明せり女は元富士見町の松の家に姫松と名乘り居る頃より末吉と馴染を重ね夫婦約束迄なせしが其後他に情夫が出來たるより末吉に秋風を立て本年春神樂坂へ住替へたる後は同人の座敷へは顔出しもせぬより末吉は嫉妬の炎を燃し同夜吉奴が吉熊にゐる事を突止め歸りを待受け積る恨を述べんとせしが薄情にも吉奴は末吉の顔を見やる否や「キヤツ」と叫んで跣のまゝ逃げ出したるより末吉が追ひ駈け前記の始末に及びたるものなりと」云々とあつた』。

棠三は言葉を切つた。

『それから何うした?』香川は訊いた。

『二十行位の短い記事にして早速工場へ廻はした。「縁日で藝者の悲鳴」といふ三號見出しを付けて』。

『それを讀んだ時どんな氣持がしたい?』。

『別になんとも思はなかつた。新聞記者を二年もすればどんな事にでくわしても何とも思はなくなるよ。然し何時だらう』。

『一時十分前だ』。

『歸るか?』。

『歸つたつて爲方がないぢやないか?』。

『では大川端へでも行くかな?』。

香川は點頭いた。二人は今川橋から俥に乘つた。違つた心持を乘せた二臺のゴム輪の俥は音もなく大川端の方へ走つて行く。

人と超人

バアナード・ショウ作
堺利彦譯

第二幕

リチモンドに近き或る山荘の園内なる馬車道に自働車が一臺破損して居る。自働車の後には一群の木立があつて、馬車道は其の木立を廻つて館(やかた)に達するので、館の一部は木立の間から透いて見えて居る。タナアは自働車を右手にして馬車道に立つて居るので、そこからは館の西端が木立に妨げられずに左手の方に見える筈であるが、彼は今、自働車の下から突出て居る、青のセル地のズボンを穿いた、仰向の二本の足に氣を取られて、脊をかゞめて、兩手を膝に當てゝ、一心にそれに見入つて居る。彼が革の外套を着て、先の尖つた帽子(キヤツプ)を冠つて居る所は、今自働車から降りた人たる事を示して居る。

足　うまい！　〆めた。

タナア　もう可いかい？。

足　もう宜しい。

タナアは俯向いて、其の二本の足の踵を持つて、手押車のように其人を引張りだす。其人は兩手で歩みながら、口に槌をくわえて出て來る。青いセル地のサツパリした服裝の青年で、髭は剃りおとし、目は黒くて、指は太くて、短い黒い髮はキチンと掻き分けられて、稍不規則な眉は懷疑的にそつて居る。(譯？)彼が車を扱ふ時の動作は、敏捷で而も愼重である。タナア及びタナアの連の人々に對しては、少しも恭々しい態度はなく、只言葉ずくなに冷然として、隨分露骨によそ／＼しくしては居るが、それでも其の人達に苦情の口實は與へぬだけにして居る。然るに彼は常に其の人達に對して注意ぶかき見張をして而もそれが、自分は世の中の暗黒面を知り拔いて居るといふ、頗る皮肉な態度である。彼れの言葉はユックリして、そして諷刺の氣味を帶びて居る。そして其の言葉の中に少しも紳士ぶる所のないのを見ると、其の氣の利いた風采をして居るのは、雇主に對して敬意を表した譯ではなく、自分及自分の階級に對する自尊心からであらうと思はれる。

扨彼は今、器械をためさんが爲に車に乘つて、再び帽子(キヤツプ)と外套とを着た。タナアは革の外套を脱いで車の中にほりこむ。彼れ運轉手は槌をしまひながら、振向いてタナアに向ふ。

運轉手　もう澤山ですかね。

タナア　まあ暫くあの家に入つて、足でも延ばして少し神經を鎮めよう。（懷中時計を眺めながら）君知つてるかね、ハイドパークの角からリチモンドまで廿一分で來たんだよ。

運轉手　途中にズウット人さへ居なからうもんなら十五分以内で來たんですけれど。

タナア　なぜ又そんなにするんだらう。只走る

のが面白いのかね、それとも此の可愛そうな主人を怖がらせるのが面白いのかね。

運轉手　あなたが何を怖がるんです。

タナア　巡査と、それから首の骨を折るのが怖い。

運轉手　ユル〳〵樂に行かうと云ふのなら、乘合馬車がありまさア。それなら賃錢も安い。あなたが私を雇ふのは、時間を省いて、そして此の一萬圓の車の値打を出さうとするのでせう。（運轉手靜かに座る。）

タナア　我輩は此車と、それから君の奴隷だ。此の厄介物の事を我輩は夢にまで見るんだ。

運轉手　ナニ直ぐ馴れまさア。所で、あそこにお出になりや、どのくらゐ時間が掛りますね。若し御婦人方との御話でお晝までも掛るようでしたら、私は車を廐に廻して休息しまさア。それとも直ぐに出ておいでなら、こゝらでチャンと斯うして待つてます。

タナア　こゝで待つて居て貰つた方がいゝ。そんなに長く掛りやしない。アメリカの若い紳士でマローンとか云ふ人が、米國式の蒸汽自働車でロビンソン君を乘せて來る筈だが。

運轉手　（飛びあがつて急に車を降り、タナアに向ひ）米國式の蒸汽自働車！。ぢや何ですね、それが倫敦から我々と競爭したんですね。

タナア　多分モウ來てるんだらうと思ふ。

運轉手　そうと知つたら！。（と、深くタナアを責めるように）あなたはナゼそれを私に知らせて呉れなかつたんです。

タナア　ナゼだつて、此車は一時間に八十四マイル走れると聞いてるし、それに競爭車があるとなると、君が何をやりだすか我輩は知つてるから。なア君、ヘンリー、君には折々聞かせられない事があるよ。是も其の一つだ。然し喜び玉へ、今日は是から君の思ふ存分やらせるから。其のアメリカ人はロビンソン君と妹君とそれからホワイトフイルド孃とを乘せる。そして此方はローダ孃を乘せる筈だ。

運轉手　（それで大きに機嫌を直したが、又チョット外の事を氣にして）ローダ孃ていのはホワイトフイルド孃の妹さんの事なんでせう。

タナア　そうさ。

運轉手　へえ。それでホワイトフィルド孃は外の車に乘るんですか。あなたと同じ車ぢや無いんですか。

タナア　何んだつて彼人が我輩と一緒に乘るもんかい。ロビンソン君がそちらの車に乘るんだ。（運轉手は受取れぬといふ顔付で冷かにタナアを見たが、低い口笛で流行唄の節を吹きながら、自働車の方に向く。タナアは是に少しく氣を損じて、何かまだ其事を云はうとしたが、丁度そこにオクテビアスの足音が敷砂利の上に聞える。オクテビアスは自働車乘の服裝ではあるが、外套は着ないで、今舘の方から出で來る。）ウム有がたい、競爭には負けたんだ。ロビンソン君がやつて來た。ヤア、テビー、蒸汽自働車は成功かね。

オクテビアス　まあそうだね。ハイドパークの角から十七分でこゝまで來た。（運轉手は憤慨して、不平の唸りを發しながら車を蹴る。）君の方は幾らで來たね？。

タナア　ウム、何でも四十五分ばかり掛つたよ。

運轉手　（大いに抗辯しながら）もし、もし、タナアさん、ちよいと御待ちなさい。我々の方だつて十五分以内で樂に來られたんでさア。

タナア　ウン、時に君を一つ紹介しよう。オクテビアス●ロビンソン君。エンリー●ストレーカー君。

ストレーカー　初めて御目に掛ります。エンリー●ストレーカーなんて、タナアさんの御冗談ですよ。どうかヘンリーと呼んで下さい。尤もどうたつて構やしませんがね。（譯？）

タナア　テビー君、君は又、僕が例の惡口で此男をからかふと思ふだらうが、決してそうぢやない。此男の親爺は無暗にHを附けて發音したものだが、此男は又それよりも烈しく無暗とHを省いて仕樣がない。此男の名には、それが丁度自分の一族の定紋の樣なものなんだ。凡そ此エンリーといふ男くらひ自分の階級を自慢にする人間を僕は見た事がない。

ストレーカー　モシ、モシ、タナアさん、少し御寛容を願ひますよ。（譯？）

タナア　御寛容、そうらねテビー、あんな言葉を使ふ君ならモ少し御手柔かにとでも云ふ所だらう。然し此奴には敎育があるんだからね。而も我々の知らない事を知つてる。何と云つたッけなア、ストレーカー、君の寄宿してた塾は？。

ストレーカー　シャーブルック・ロード。

タナア　シャーブルック・ロードー。我々にや迚もそんな風に大威張で、ラグビーとか、ハアローとかイトンとか云へやしない。シャーブルック・ロードは幾らか小供に物を敎へる處だが、イトンなんぞと來ちや、我々小供が內にゐると邪魔になるもんだから、それに又、我々が大人になつてから、何々侯爵の噂なんぞ出た時に、ありや我輩の同窓です、なんて云ふ事の出來る爲に、それで皆んなそこに追ひやられる小供置場なんだ。

ストレーカー　タナアさん、あなたにや分りませんよ。物を敎へるのは其塾ぢやありません。工藝學校でさア。

タナア　それが先生の大學なんだ。ねえオクテビアス。オクスフォードに非ず、ケムブリッヂに非ず、ダラムに非ず、ダブリンに非ず、グラスゴウに非ず、亦彼のヱールス地方に於ける非國敎的の巣穴にも非ず。なア君、テビー。リジエント・ストリートといひ、チエルシーといひ、ゼ・ボローといひ……僕は一々其名を覺えちや居ないがそれらが即ち彼れの大學で、我々の大學のように階級的制限ばかりを賣る店ぢやないんだ。ねえエンリー、君はオクスフォードを輕蔑してるだらう?。

ストレーカー　いえ、そんな事はありませんよ。オクスフォードは全く好い處でさア、そういふ風の向々の人に取つちやねえ。オクスフォードでは紳士にする事を敎へるし、工藝學校では技手か何かになる事を敎へるんでさアね。

タナア　皮肉だよ、君皮肉だよ!。君が若しエンリーの腹の中に入つて、彼が如何に深く紳士なる者を輕侮し、如何に高く技手として自ら標致して居るかを見たなら、君は蓋し仰天するであらうと思ふ。彼は實際此車の破損する事すら喜んでゐる。何故かといふに、其時には即ち此の僕の紳士的無能と、彼れの技術家としての才能熟練とが現はれて來るが故に。

ストレーカー　ロビンソンさん、どうかお聞棄になつて下さい。タナアさんの御話は何時でも大業なんですから。極つてまさア。

オクテビアス　（眞顔で）然しあの言葉の底に大いなる眞理がある。僕も勞働の尊嚴といふ事は堅く

信じて居る。

ストレーカー　（一向感心せず）そりやロビンソンさん、あなたがまだ少しも勞働をやつて御覽にならないからです。私の職業は勞働を省く爲です。私一人と器械とがあれば、勞働者廿人よりも餘計な仕事をします。（此處一句不明）

タナア　オイ君テビー、經濟學の話を初めさせちや大變だ。彼は其の方は十分に心得て居るが、我々は何にも知らない。君は詩的社會主義者に過ぎないが、彼は科學的社會主義なのだ。

ストレーカー　（落ちつきはらつて）そうです。時に大變有益なお話でしたが、私や是から車の世話を仕なきやなりませんし、あなた方はお二人で御婦人達に就いての御話がありませう。知つてますよ。

（彼は車の世話をすべく、そこを立去り、やがて舘の方に歩みゆく。）

タナア　實に重大なる社會現象だ。

オクテビアス　何が？。

タナア　あのストレーカーがさ。此の數年來、我々文士學者連は、少し並外れの舊式の婦人を見ると、頻りに『新しい女』といふ叫びを擧げたものだが、『新しい男』の來降には少しも氣が付かずに居た。ストレーカーは即ち『新しき男』なんだ。

オクテビアス　何もあの男に新しい所なんぞ少つともありやしない。君の冷かし方が新しいばかりさ。然し僕はあの男の事よりか、少しアンの事を君に話して置きたい。

タナア　ストレーカーはそれをも知つて居た。恐らくそれも工藝學校で學んだんだらう。所で、アンがどうした。君言ひだしたのか。

オクテビアス　（さも悪かつたといふ體にて）實に亂暴だつたけれど、昨夜とう／＼言ひだしたよ。

タナア　亂暴だつたけれど！そりやどういふ譯だね。

オクテビアス　（熱情をこめたる聲にて）君、我々男子は皆な不作法だよ。婦人の感情が如何に微妙なものであるかは到底男に分らない。僕はマアどうしてあんな事をしたんだらう！。

タナア　どんな事をしたんだよ。君はほんとに泣虫の阿呆だよ。

オクテビアス　そうだよ、僕は阿呆だよ。マア君、あの聲を聞いて見玉へ、あの涙を見て見玉へ。

僕は昨夜それぱッかり考へて夜どはし眠らなかつた。アンが若し僕を責めたのなら、僕はまだ我慢がしよいのだけれど。

タナア　涙といふ奴は危險だよ君。アンは何と云つたね。

オクテビアス　今の場合、お父さんの事より外に、物を思ふ心の暇が無いと云つたよ。そしてヤットの事で啜泣を抑へて居たよ。（オクテビアス、ぐつたりとショゲて了ふ。）

タナア　（其脊中を叩きながら）オイ君、確かりしなくちやいかんぜ。馬鹿だなア。お定まりの古い手ぢや無いか。アンはまだ君をおもちやにし足りないんだ。

オクテビアス　（堪りかねたといふ體）馬鹿を云つて呉れるなよ君。君のその薄ッぺらな年中の惡体口が、アンの樣な性質の女に少しでも當てはまつて堪るものかい。

タナア　成程！。でアンはまだ外に何か云つたかい。

オクテビアス　云つたよ。だから僕は今、君に冷かされると知りつゝ、其事を話しに來たんだ。

タナア　（サモ心苦しき體にて）オイ君、テビー。僕は冷かすんぢや無いよ、斷じて。だけどマアそれや可いや。話し玉へ。

オクテビアス　一体アンは義務の觀念が實に痛切で、實に完全で、實に――

タナア　ウン、そりや分つてるよ。それで？。

オクテビアス　云ふまでもなく、今では君とラムスデンとがアンの後見人になつてゐる。それでアンの心では、父に對する總ての義務は、今では悉く君等に移つて居る。それで此事に就いても、先づ一番に僕から君等兩人に話すべきだとアンは云ふんだ。勿論そりや其の通りさ。だけど何だか斯う、僕が今改まつて君の前に出て、君の被後見人に對して求婚者たるの承認を求めるなんてあんまり馬鹿々々しい樣な氣がして仕樣がない。

タナア　テビー、君が戀の爲にまだ全く滑稽の趣味を失はなかつたのは結構だ。

オクテビアス　そんな返事をしたつてアンが得心しやしない。

タナア　それでは我輩の改たまつた返事は斯うだ。願はくば二人の上に幸ひあれ。お芽出とう！。

オクテビアス　君、冗談はモウ好い加減によしてくれよ。僕に取り、又アンに取つちや、實に眞面目な事なんだから。

タナア　然しアンが君と同じく配偶を撰ぶの自由を有して居る事は分り切つてるぢやないか。

オクテビアス　所が、アンはそう思はないんだから。

タナア　アンがそう思はない！。如何にもねえ！。然しマア好いや、それで僕にどうしろと云ふんだね。

オクテビアス　只君が飽くまで眞面目に、僕に對して君の見る所をアンに話して呉れゝばいゝのだ。ツマリ、君が僕を以てアンを托するに足る男だとして呉れゝばいゝのだ。若し君が實際そう思つて呉れるならば。

タナア　アンを君に托するのは勿論大丈夫だがね、只君をアンに托するといふのが僕の氣遣ふ所だ。君はメーターランクの蜂の本を讀んだかね。

オクテビアス　（辛うじて不機嫌を抑へながら）僕は今文學を論じてるんぢやない。

タナア　マ少し我慢して聞き玉へ。僕も文學を論じてるんぢやない。其の蜂の本は博物學だ。そして人間の爲に非常な教訓になる。君は今アンの求婚者だと思つて居る。君が追ひかけて、アンが追ひかけられてると思つて居る。即ち君の方から持ちかけて、說きふせて、納得させて、そして手に入れるものだと思つて居る。馬鹿だね。實は君の方が追ひかけられて、敵に目星を付けられて、獵の獲物と極つて居るのだ。何もそんなに鼠罠の網の外から、欲しそうな顏をして餌を眺めて居るにや及ばない。戸はチャンとあいて居る。いつまでもあいて居る。そして君が其中にはいると、初めて其跡が永久に閉まる。

オクテビアス　君は隨分ひどい言方をするが、僕も實はそう信じたいのだ。

タナア　まあ君、考へて見玉へ。女の身に夫を持つより外の仕事がどこにある。それで一日も早く結婚しようとするが女の務、一日も永く結婚せずに居ようとするのが男の務とする。君は詩を作つたり、悲劇を作つたりするんだが、アンのする事は何んにもありやしない。

オクテビアス　僕はインスピレーションがなく

ては書けない。そして僕にインスピレーションを與ふる者はアンの外にない。

タナア　アンからインスピレーションを得ようとするなら、もつと遠方からの方が安全だせ。昔のペトラークがローラを見たのも、ダンテがビートリスを見たのも、皆なそんなに君がアンを見るやうに近くは無かつたんだ。それでもあの通り名歌を作つて居る。とマアいふ事だ。彼等は蓋し其の偶像崇拜を家庭生活のためしには掛けなかつた。そして其の崇拜が一生涯續いて居た。君が今アンと結婚して見玉へ、一週間も立たうものならアンのインスピレーションは消えて了つて、輕燒煎餅の一皿くらゐなものになつて了ふ。

オクテビアス　ぢや君は僕がアンに飽きると思ふのか。

タナア　そうぢやない。君はいつまでも輕燒煎餅を食ふが、只其中にインスピレーションが無くなる。そして彼女が既に詩人の夢に適せず、十五貫もあるドツシリした細君になると、君もモウ彼女に慣れて了ふ。そして又何處か外の人を夢みる事になる。サアそれからが騷ぎになる。

オクテビアス　君もうそんな話はよして呉れ。君に分るもんか。君はまだ戀をした事も無いぢやないか。

タナア　僕が！僕は未だ曾て一日も戀を忘れた事がない。アンにだつて僕は矢張り戀をしてる。只僕は戀の奴隷ともならず、ヤツコともならない。オイ詩人、ちと蜂の遣方を考へて見玉へ。そして少し利口になり玉へ。ほんとだよテビー、若し女が我々の働きに依るの必要がなく、そして我々が自分にはパンを作らずに小供のパンを取つて食つて居たら、女はキツト我々を殺すよ、男蜘や雄蜂が殺されると同じ樣に。そしてそれが當前さね。我々が若し戀の外に何の役にも立たないとすれば。

オクテビアス　ある〳〵眞に能く我々が戀の役に立つたらなア。凡そ世の中に戀に比すべき者は無い。戀の外に物は無い。戀が無くては世は只醜惡無殘の夢である。

タナア　おや〳〵、是が我等の被後見人の手を取らうとする人物なのかな！オイ君、君と僕とは赤坊の時に取替られたのかも知れないせ。君こそ本統のドン・ジュアンの血統だ。

（註。ドン・ジュアンとは業平と云つた樣な昔噺の人物で、一面には好色家といふ意味を有し、一面には因習道德の破壞者といふ意味を有して居る。ジュアンは英語のジョンと同じで、此作の主人公ジョン・タナア（通稱ジャック）は即ちドン・ジュアンの再來といふ樣な譯になつて居る。尤も當世のドン・ジュアンは、戀愛の關係に於いては、追ひかける人でなくて追ひかけられる人になつて居る。そこで「君こそ本統のドン・ジュアンの血統だ」といふ言葉が出るのである。猶此事に就いては、第三幕の所で十分解說する積りです。」

オクテビアス　そんなことを君、少しでもアンに云つちやイケないよ。

タナア　大丈夫。アンはもう君に目星を附けて居るんだ。外しッこはありやしない。君はモウ運の盡だ。（ストレーカー新聞紙を持ちて出で來る。）ヤア又『新しき人』が、例の通り半ペニイ新聞に夢中になつてやつて來た。

（未　完）

（右の文中「譯?」とあるは、譯者が譯文に疑ひを存する點なり。若し讀者諸君の御教示を得ば幸甚。猶其外の部分に對しても、別項かれ子君の『誤譯指摘』の如き御教示なり或はモット突込んだ批評なり、攻擊なりをしていたゞきたい。譯者記）

■ファウスト評論（誠　響　谷　著）

鷗外がファウストを飜譯してから、急にファウスト熱が勃興して、數年前の飜譯まで再現したが、未だ此の古典文學の內容、意義、組織、及び歷史等を註釋評論したものとては、餘り聞かなかつた。書は、此の方面に於て大なる貢献を爲せるものと云つてよい。

即ち古き獨逸の國民物語が、ゲーテに採用さるゝに至る迄の徑路を、無慮八百數十頁に亘つて詳細精密に評論せる點、正にファウストに關する著書中の白眉と稱すべきである。然し凡ての文學者の著書の常として、ゲーテが彼のファウストを著はした當時の社會的大變化、即ち資本家階級が封建君主を倒して勃興せる社會現象が、ゲーテの心理に影響、而して亦、その必然にファウスト中に現はれた思想に就ては、些の思索する處の無いのは甚だ遺憾にせねばならぬ。（寒）（定價金二圓小石川區櫻木町六北文館）

■架空の頹廢（矢　口　達　譯）

オスカア・ワイルドの The Decay of Lying の飜譯である。ワイルドの意蓋し藝術を絕對と見做し、藝術上のリアリズム排斥して唯美主義を皷吹したのであるが、こういふ純藝術論は僕にはよく解らない。然しこんな句もある。『彼等（事實）は人類を野卑にせんとして居る……それ等は虛言を吹き得なかつたと自ら告白する人間を國家的英雄として採用する國家に罪がある。ヂョルヂ・ワシントンと櫻の木の話が、より短い時になした害毒は、文學全體に於る寓話のそれより更に大である……。』云々。（寒）（定價金四十錢小石川區高田豊川町新陽堂）

讀んだだけ

寒

■未來の王國（淺野友譯）

前號にも大杉が一寸書いたが、アナトール・フランスの『白い石の上』の飜譯の續きでまだ未完である。産業の發達資本の集中と共に勞働者が團体を作つて權力階級を轉覆し、終ひには無線電話や無線電信が歐羅巴の隅々まで行き渡り、どんな貧民でも思ふ時に地球の何處に居る人々とも自由に話が出來、露西亞の百姓がベルリンやマルセーユの人々と、寢ながら話をする。それと同時に飛行機や飛行船が正確に實用に供せられる樣になつて、國境といふ觀念が失くなり、愛國心に影響を及ぼし、とう〳〵全歐洲に國王も貴族も軍隊も無くなつて了ふ。結婚などといふものはカフイール人の間に殘つた習慣で、もう肉體上精神上の便宜を度外視して契約に依て自分を束縛するものは無い。そんな家族といふ觀念は無くとも、最も烈しい本能たる母の愛は、多くの婦人をして男子と共同して子を育てさせて居る。

こういふ新時代の有樣の說明が非常に面白いが、殊に面白いと思つたのは、モレンがヒポリーテに文學を說明して、詩人や小說家は大抵速記法を用ひ、また人々が現實に關する精細な智識を持つて居るのと、亂暴狼籍な振舞がなくなつたのとで、悲劇の存在する理由がなくなつたと云つて居るが、是と殆んど同じやうな意味を、確かモリスも『ニユウス・フロム・ノウホエア』で書いて居た。（青鞜）

■刑餘の人々（德田秋江）

牢獄を出ると悉皆考へが變つて、デカダンと云はれて居る作者が感心する程の放蕩者になつた或る社會主義者の送別會で、同じ仲間の刑餘の徒が集まつて、下らない世間話や、監獄生活の話やら、女の話やらをしたと云ふだけのもの。作者は『自分は社會主義にはバルガリザーがあるから嫌ひだ』と、作中に云つて居るが、此の作は畢竟社會主義者の所謂バルガアな處を示さうとしたものだらう。

苟くも雜誌の上で、社會主義にはバルガアな點があると、堂々と書くからには、滿更デタラメでもあるまいし、また些しは社會主義も研究したのだらうが、蠣殻町へばかりお通ひになつた上品な方から見て、一體どういふ點がバルガアなのだか後學の爲めに伺ひたいものだ。（新日本）

■君と私と（里見　醇）

白樺六月號が發賣禁止になつたのは、此の小說の爲めだといふ事だが、僕は此の前の號に出た前篇から面白く讀んで居た。大杉がいつか白樺同人の事を非常に賞めて、クロポトキンなどもこういふ人達の更にコンパアトしたものだらうと書いた事があつた。是は上流社會や智識階級に對する僕の偏見があるからかも知れないが、僕は白樺の人達に對してそう大したインテレストは有たない。しかし常から敬服して居る事は彼の人達の如何にも自意識の强烈な、冷靜な客觀的態度を執つて居る事である。所謂文學者の個人主義といふものは、如何にもメソメソした、弱々しいもので、見ても胸が惡くなるが、彼の人達にはそれが非常に强い調子で出て居るので、心憎いほど痛快である。何時かも一休和尙を藉りて『腹が空いたら盜んで喰ふのは善事だ』といふ思想を顯はした脚本が載つた事があつたが、確かに此の强い個人主義としての一面が窺

ばれると思ふ。此の『君と私』はそういふ意味や思想を寓したものではないが冷靜な、自意識の强い彼の人達が、その日常生活を內省し、批判する態度の窺はれる作として、僕は甚だ面白いと思つて讀んだ。

然し、彼の人達がもう一段のコンパアシヨンをなすには、彼の人達がクロポトキン等のやうになるには(クロポトキンのやうにならなくてもいゝと云ふかも知れぬが)自個と社會との關係を自覺せねばならぬ。そして此の自覺に到達したものは、必然に反逆者とならなければならぬと思ふのである。(白樺)

■富士登山　(江見水蔭)

ワザとらしい齒の浮くやうな女權擴張論をやる女學生を登山の中途に弱らして、舊い女の講中に嘲笑させたり、紳士が天狗の面を被つて出て、出齒紳士や、生意氣女學生や、强力なぞを脅かして富士山の神聖を說いたりする、喜劇といふよりも俄か芝居に近いものだ。

云ふだけ野暮かも知れないが、こういふ愚作を見ると、老朽作家がお上さまと一緒になつて時世に憤慨?して見るが如何ともならず、活動寫眞の餘興にありそうな俄か芝居を書いて、辛うじて餘憤を洩して居るかと思はれて哀れとも笑止だ。まづは文壇の桐花學會と云ふ處だらう。(新小說)

■小さき破壞　(小川未明)

二人の少年の主人に反抗する感情や、幼年時代の追懷や、まだ見ぬ遠い國の空想や途に主人の金を拐帶して失踪する經路は面白いと思つたが、最後に政治的擾亂のあつた際、その少年の一人が日頃の屈從に對する不平を勃發させて放火をして捕へられたといふのが、餘りに唐突で、その玆に到つた間の精神的變化に對する何の說明も無いために、取つて付けたやうな氣がする。(早稻田文學)

左の三書は次號で細評する

■生　靈(正宗白鳥著)　金尾文淵堂
■思想問題(上田　敏著)　同
■月　光(中村星湖譯)　海外文藝社

■寄贈雜誌

馬上大學　實業之世界
新公論　婦人評論
內外教育評論　護　教
帝國文學　凍　野
モザイク　新　潮
新佛教　人生と表現
東京魁新聞　白　樺
新東京　大國民
野の聲　ニコ〱
村落通信　青　鞜
鑛業及鑛夫　獨立評論
相　對　新眞婦人
圖書評論　紅　潮
聖　盃　ダイヤモンド

■六月號目次■

近代思想社小集

暮村隱士

私は『近代思想社』の小集に御客樣として一度、會衆の一人として一度、都合二度出席した。最初の御客樣の時、同社同人諸君の頗ぶる博學多才でそして其ヨタリズムの盛んなるに驚いて、又其喋々囂々たる談論に極めて興味を感じたので、以後は會衆の一人として出席する御許しを乞ふた次第である。

謂ふこと勿れ、同社の小集は何時も御客樣として現代文界の名士を招いておいて、同人等寄つてたかつていぢめ付けるのであると。私の實驗に據ると決してそんな事はない又。假令そんな事があつても、如何に博學多才にもせよ、高が——これは失敬——窮學究——又失敬、何れ窮の字は取消す時代來る可し——に過ぎぬ。其質問や論談に對して辯難する——所謂ヨタルことの出來ない樣な頭で、文士で候の、學者で候のと威張つて通ることができるか。彼等だとて惡魔でもなければ修羅でもない。至つて人の好い人達だ。今後お招きに與つた諸君は安心して出席される樣に願ふ。(これは頼まれもせぬことだが序ながら一言して置く。』

私が二度目に出席したのは六月の八日、文藝協會の内紛が起つて島村抱月君と松井須磨子女史の評判が殆んど絶頂に登つた時下絃の月がメーゾン鴻の巣の軒をのぞいて同人諸君の談論を羨ましさうに傍聽でもしてゐるかの樣な夜であつた。

玆にまだ往つたことない人の爲にメーゾン鴻の巣の事を一言する。これは一箇の甚だ大いならざる西洋料理屋である。喰せるものは甘い。は入り心地も好い。居心地も惡くはない。其二階の窓から河を臨んで欄干にもたれてゐるとドンゴラが水を滑つて下を通りさうだとか、ヴェニスに來たやうな氣分がするとか、非常に灰かつた言を云つた人もある位だ。何んにしても一寸好い料理店だ。諸君往つて見給へ。(これも亦頼まれもせぬが序だから——)

其夜の會衆は前回の時よりは多かつた。近代思想社同人は固より外に馬場孤蝶君が見えた、片山潜君が見えた、上山草人君も、伊庭孝君も見えた。私もその一人である。上山君は『ファウスト』劇の主人公に、伊庭君は亦そのメフヒストフエレスに扮して有名な人だが舞臺と素とは案外の相違。御兩人とも流石は役者——と云つては舊式で惡いかも知らぬがまあ許し給へ——で極めて奇麗な方だ。就中伊庭君は曲亭あたりの古い筆では、女にして見まほしくとか何んとか形容されさうな好男子だ。而かも此好男子頗ぶる輕快の辯者である。當夜の話題は主として其優しい赤い唇と白い齒の奥から湧いた。渾々泉の生ずるが如く、滔々河の流るゝが如く、現代語近世語古語、佛語獨語英語殆んど不盡の勢ひで語り出さるゝ。私は頗ぶる感服した。

之に次いでは安成貞雄君の極めて多方面な雄辯である。當夜和氣律次郎君はどうしたことか常の氣焔に似ず、早く歸へられたが淡い月光を浴びて鎧橋の上に戀にやつるゝ美人が立づくみに俟つて居たとか居ぬとか問題は極めて艶ぽい話が出たやうであつた。但し是等は當夜談話の一大中心ではない。唯婀娜たるエピソードのみである。

當夜の話題を玆に科學的に排列すると頗ぶる長く頗ぶる廣い。上は天文下は地理では甚だ舊式の舊式だ。星學から人類學、心理學、倫理學、社會學、文學、小說、劇、詩、天地未剖、陰陽不分、渾沌として未だ生の何たるやの明かならぬ暗い夜が赤い旦

か。天地乾坤所を異にする所以の秘奥、談じて至らざるはなく論じて盡さゞるはない。殊に況んや皆現代の御若い方のお揃ひで古臭い茶事の嗜みなどはと想ひきや、茶臼の如何に廻轉し、薄茶濃茶の如何にして造らるゝか、古くは利休近くは四方庵も三舍を避く可き秘傳古實傳說發見、之に西洋趣味のキッス、イントロダクション、カンミング等世界に於ける當面の重大問題を捕へ來つての談論。若し之が畵になるものなら地下に歌麿を呼び起して其艷な筆を執らせたかつたのである。

是に於て私は鴻の巣のカヽシ集中の一帖を汚し、當夜の小集に題して曰く『以談論爲英華』と。但し誤つて論の字を脫し、談の字の上に○の字を書いた。若し見る人あらば須らくこれ當夜の誤脫であると思つてくれ給へ。

□土岐哀果の歌集『不平なく』が、春陽堂の現代文藝叢書の一として出る。佐藤綠葉の飜譯、ト翁作『生ける骸』も近々發刊の筈。

□近代劇協會は來月有樂座で、ショウの『武器と人』の改題『チョコレート兵隊』、及びダヌンチオの『秋夕夢』をやる。

大久保より

榮

■五月は社の都合で小集を休んだ。そのかはり本月は、人數もいつもよりは多く、隨分にぎやかな會だつた。何うしたはづみからか、話が大ぶ妙な方へはづんだ。もう散會しやうとなつて、みんな帽子をかぶつて立ち上りながら、まだ何んのかのとしやべくつてゐて、なか〳〵歸らうとしない。

■久津見先生最も熱心に講義をする。そして時々堺に向つて、『ソラ、あの時さ』とやる。堺は妙なしかめ面をして、仕方なささうに『ウン、ウン』とうなづく。馬場先生もなか〳〵明快な講義をする。しばらく横になつてゐた土岐が、ふいと座り直つて、『どうだ、皆んなもうウチへ歸りたからう』と告白らしい事を云ふ。

■きむづかしい伯父さんみたやうな顔をした片山が、折々口を出して、アメリカあたりの話をする。貞雄と伊庭とは薀蓄を傾け盡す。始めて來たトルストイヤンの江渡と久板とは、あつけらかんとしながらも、謹しんで聽いてゐる。

■實はこの會の記事をどう書かうかと困つてゐたのだが、幸にも暮村居士から前記の記事を送つて來てくれた。早速お禮のはがきを書いて曰く、『さすがはあの道にもこの道にも老練の大家と感服仕る』

■集まる者、馬場孤蝶、久津見蕨村、片山潜、安成二郎、安成貞雄、和氣律次郎、土岐哀果、上山草人、伊庭孝、堺利彥、高畠素之、小原愼三、江渡幸三郎、久板卯之助、荒畑寒村、大杉榮の十六名。

■四月の半ば頃から、何んだか氣分が惡くて、しなければならぬ仕事も兎角になまけ勝ちになつてゐたが、この會の後四五日して醫者に診察して貰ふと、右肺の尖端に少々水泡音が聞えると云ふ。尤も喀痰に異狀もないさうだし、まだ〳〵ご吹聽に及ぶ程のものでない。ホンの、うまい物をれだる口實が出來てうれしい位の程度のものだ。

■堺にこの話をしたら、煙草をよすがいゝ僕もお相伴してよさう、と云ふ。いやな事だ。それでは僕の方がよつぽど損をする。堺の煙草などは誰れでもよされる程度の煙草だ。そんなのお相伴はいらない。僕は僕ひとりで行く。

■九州のある地方の讀者から、こんな端書が來た。『私が近代思想を購讀してると云ふ事が、何時の間にか警察に知れて、一日警

官の來訪を辱うした、お尋れの次第は、其方は何時から此雜誌を讀んでゐるのか、又如何なる動機で讀むやうになつたか、と云ふやうな事であつたが、猶雜誌を貸してくれと云つて一部持つて行かれた。然るに其後再びやつて來て、この雜誌は購讀をよしたがよからう、是非よせとは云はぬが、其方の身の爲めには直ぐよしたがよからう、一體此雜誌の二人は最大危險人物なのだから、雜誌の内容の如何に係らず、讀者も矢張り警戒せられるやうになると云ふ御託宣であつた。』その外にも之れに類した通信が、六月の中頃から毎日二三通づゝ來る。このご深切な忠告に從つて、よした人も大ぶあるが、併し又、シヤクに障るからと云つて、更に新しく讀者を紹介してよこしたた人もある。お上のお方に一寸申上げるが、あまりご深切かすぎるゝ却つてお爲めになりますまいよ。

■山川夫婦は、先年均の出獄と共に、相携へて岡山の方へ行つたきり、遂に何等の音沙汰もないが、此頃守田有秋からの報知によれば、夫人里子女史は昨年からの病氣での五月二十九日に死んださうだ。

■定價一册金十錢、半年分前金五十五錢、一年分前金一圓。但し外國は別に一册金二錢宛の郵税を要す。

■郵券代用は五厘切手に限る。但し一割增の事。

■廣告料特別一頁十五圓、普通十圓。

■本社振替貯金番號一七一六三。句點

大正二年六月二十九日印刷納本
大正二年七月一日發行

府下大久保百人町三五二
近代思想社内
編輯兼發行人　大杉榮

府下大久保百人町三五二
印刷人　荒畑勝三

京橋區銀座四丁目一番地
印刷所　敎文舘印刷所

大賣捌所　東京堂、上田屋、東海堂、北隆舘

野上彌生子先生譯

▲▲最新刊▼▼

傳說の時代

菊版美装約八百頁

挿入寫眞五十枚

希臘古彫刻等皆珍品

定價金一圓

郵税金十二錢

文藝界の大寶庫

神々と英雄の物語

神話傳說の知識なくして完全に理解され得る西洋の文藝は殆ど無いと云つて差支へありません。その傳說神話を小說よりも面白く讀ませるように書いた此の本は、原著者が希臘羅馬を初め埃及印度北欧に亘つて一千餘種の傑作中より粹を拔いて書き列ねた物語集であります。小說体の神話學と云つても差支へありますまい。人間の想像力の達し得られる限りの高さに達した文藝上の大寶典であります。譯者に取つて此の飜譯は過去一年間の最も喜ばしき勞作の收獲であります。

東京市神田區南神保町十六

尚文堂書店

電話本局四二五四

振替東京一九三四四

近代思想　第一巻第十號
大正元年十月一日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
大正二年六月廿日印刷納本（大正二年七月一日發行）
七月號　金十錢

三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
大正二年六月二十日印刷納本（大正二年七月一日發行）
七月號 金十錢



東京　小林富次郎　大阪

皆様御愛用の
ライオン歯磨で
募集した
一等賞金三百圓に
當選の廣告繪

東天紅！と鶏が長鳴すると、
すぐ起き出て、
ライオン歯磨を使ふところです。
毎朝斯うすれば体も達者で勉强
がよくできます。

ライオン歯磨
ライオン浮石鹸
ライオン洗石鹸　本舗　東京　大阪　名古屋　小林富次郎
支那支店　天津、漢口、上海

大正元年十月一日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
七月號
金十錢